

クロスロード

11



特集 1

IT 分野の活動ポイント

特集 2

意欲の引き出し方



現在の派遣国数

76 カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2019年9月末現在)

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	34	2
エスワティニ	4	1
エチオピア	25	
ガーナ	49	2
ガボン	21	7
カメルーン	27	2
ケニア	50	6
ザンビア	65	10
ジブチ	12	
ジンバブエ	6	
セネガル	37	2
タンザニア	71	2
ナミビア	11	
ベナン	45	
ボツワナ	18	
マダガスカル	34	
マラウイ	44	
南アフリカ共和国	6	4
モザンビーク	36	3
ルワンダ	47	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	18	
インドネシア	15	1
ウズベキスタン	26	7
カンボジア	21	10
キルギス	31	
タイ	24	5
タジキスタン		4
中華人民共和国	7	
ネパール	55	4
東ティモール	36	
フィリピン	31	2
ブータン	16	5
ベトナム	39	16
マレーシア	15	6
ミャンマー	18	4
モルディブ	16	
モンゴル	49	
ラオス	39	1

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	7	
サモア	20	1
ソロモン	33	5
トンガ	19	2
バヌアツ	20	4
パプアニューギニア	34	5
パラオ	10	5
フィジー	23	4
マーシャル	5	1
ミクロネシア	14	6

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア	4	2

■ 中東地域

国名	JV	SV
イラン		1
エジプト	19	3
モロッコ	22	6
ヨルダン	35	

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		10	3	6
ウルグアイ		5		
エクアドル	47	6		
エルサルバドル	10			
キューバ		1		
グアテマラ	22	2		
コスタリカ	24	10		
コロンビア	19	10		
ジャマイカ	22	11		
セントビンセント	3			
セントルシア	9			
チリ	5	5		
ドミニカ共和国	27	7	3	2
ニカラグア		1		
パナマ	16	1		
パラグアイ	38	1	9	3
ブラジル			71	18
ペルー	14			
ペルー	46	5		
ボリビア	35		3	1
ホンジュラス	29			
メキシコ	2	8		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 (男性/女性)	1,732 (734/998)	235 (166/69)	89 (33/56)	30 (11/19)	2,086 (944/1,142)
累計 (男性/女性)	45,294 (24,067/21,227)	6,514 (5,266/1,248)	1,503 (575/928)	546 (252/294)	53,857 (30,160/23,697)

JV = 青年海外協力隊
 SV = シニア海外協力隊
 日系JV = 日系社会青年海外協力隊
 日系SV = 日系社会シニア海外協力隊 (単位: 人)

クロスロード

2019 NOV
Contents

職種別索引	掲載ページ
防災・災害対策	14
コンピュータ技術	10、28
木工	24
相撲	4
PCインストラクター	1、6、8、28
音楽	4
理科教育	36
体育	26、35
小学校教育	20
編集	25
理学療法士	16、22
感染症・エイズ対策	18

国別索引	掲載ページ
ウガンダ	20、35
ウルグアイ	25
エチオピア	26
ザンビア	1、8
スーダン	16
セントルシア	6
ドミニカ共和国	24
トンガ	4
バプアニューギニア	36
フィジー	22
ブータン	14
ブラジル	4
マラウイ	18
モザンビーク	10

出身都道府県別索引	掲載ページ
宮城県	22
千葉県	35
東京都	20、25
神奈川県	26
岐阜県	18
愛知県	6
大阪府	8、14
岡山県	36
広島県	24
山口県	16
大分県	10

【凡例】

- ① JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん(ウガンダ・青少年活動・2019年度1次隊)

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊（「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」）の方々は、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

- ② JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY

レイアウト：S+M DESIGN FACTORY

印刷・製本：弘報印刷(株)

4

JICA Volunteers' NEWS

- ▶ 隊員が指導を行うオーケストラが来日し、日本のオーケストラと共演（トンガ）
- ▶ 相撲を通してブラジルとの懸け橋になりたい。授業の一環として導入された相撲（ブラジル）

特集1

IT分野の活動ポイント

6

CASE 1 中等学校でのIT指導

内田佳秀さん（セントルシア・PCインストラクター・2016年度4次隊）

8

CASE 2 職業訓練校でのIT指導

津村 実さん（SV/ザンビア・PCインストラクター・2016年度3次隊）

10

CASE 3 研究施設でのIT環境整備

垣迫雄斗さん（モザンビーク・コンピュータ技術・2016年度4次隊）

12

活動Q&A集

特集2

意欲の引き出し方

14

CASE 1 行政分野

根木和幸さん（ブータン・防災・災害対策・2017年度1次隊）

16

CASE 2 保健・医療分野

武内美樹さん（スーダン・理学療法士・2016年度4次隊）

18

CASE 3 収入向上分野

岩田彰亮さん（マラウイ・感染症・エイズ対策・2017年度1次隊）

20

CASE 4 学校教育分野

鷹嘴悠史さん（ウガンダ・小学校教育・2017年度1次隊）

22

“失敗”から学ぶ

三田村 徳さん（フィジー・理学療法士・2017年度1次隊）

24

希少職種図鑑

▶ 木工 榎田亨樹さん（ドミニカ共和国・2016年度3次隊）

▶ 編集 馬場由美子さん（SV/ウルグアイ・2017年度1次隊）

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ~人生を変えた2年間~

スポーツイベントの企画・運営担当 石井麻夕さん（エチオピア・体育・2016年度2次隊）

28

OB・OG匿名座談会

IT分野篇

30

JICA海外協力隊のプチテクガイド

環境教育ワークショップ/筋トレで健康に！/あるもので日本の味

32

INFORMATION

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「質問」

35

協力隊@TOKYO 2020



熊本県立劇場での熊本ユースシンフォニーオーケストラ定期演奏会本番(共演)の様子(指揮:高間健氏)。本企画に参加したトンガの学生のひとり「また日本に行くため来年就職する」という目標を得たという。「海外で働く親族の仕立で生活することが稀でなく、『働く』ことが絶対ではないトンガ人にとって大きな成果だと思います」と尾上さんは話す

催行の流れ	
〈1年4～6カ月前〉 企画・提案	イベントを企画・構想し、熊本ユースシンフォニーオーケストラ(以下、KYO)事務局および指揮者・指導者へ打診、承諾。
〈11カ月前〉 練習開始	配属先の授業にて共演曲の練習開始。
〈10カ月前〉 助成金申請	参加者渡航費の助成金申請開始(KYOが主体)。
〈7カ月前〉 協力要請	在日トンガ大使館トンガ大使と配属先校長に実施計画の報告と相談。
〈6カ月前〉 助成決定	初の助成決定(計5団体・2個人よりご支援いただく)。
〈1～2カ月前〉 参加者の 手続開始	渡日計画をほぼ確定し、航空券予約。参加者および人数の最終調整。宿泊先確保。配属先での集中練習開始。
〈3日前〉 準備完了	航空券購入およびビザ取得完了。在トンガ日本大使館へ表敬訪問。
〈1カ月後〉 事後処理	報告書作成、御礼状の作成、送付など。

隊員が指導を行うオーケストラが来日し、日本のオーケストラと共演

Tonga

文 = 尾上香織さん(トンガ・音楽・2017年度1次隊)



熊本県熊本市にある「びぶれす広場」でトンガ音楽を披露するTTIオーケストラのメンバー。8月5～14日に来日し、熊本県内にて演奏、交流などを行った

私はトンガのトウポウ高等専門学校(以下、TTI)の音楽科で弦楽器の指導を行っています。弦楽器が知られるようになって日が浅いトンガで、なんとか弦楽器を広めたいという同僚の思いから、トンガ初となるTTIオーケストラが5年前に誕生し、トンガ人の生活に欠かせない音楽の一端を担う存在になりました。

今企画の発端は、国際交流演奏で日本に行けたらいいね、と同僚と意気投合したことでした。それを今回交流の受入母体となった、私がボランティア指導者として所属している熊本ユースシンフォニーオーケストラ(以下、KYO)へ提案したところ快諾をいただきました。企画の最大の目的は音楽を通じた国際交流で、同世代の若者同士が刺激を受け合い今後につなげてほしい、ということ。また、ラグビーワールドカップ2019でトンガ代表が熊本で試合することも視野に入れ、トンガ独自の音楽の披露によってその宣伝効果をもつことも企画の要素と考えました。

現地での準備は私ひとりで行っていたため、KYOの存在・協力は実現できず、

きませんでした。特にトンガ人の渡航費工面に苦労しましたが、最終的に5団体・2個人より助成いただけることとなりました。準備期間は一進一退の日々。配属先の校長や同僚とも言葉の壁や考え方の違いによる誤解が生じ、幾度となく口論もりましたが、日本に行くという目標は揺るがず、互いに理解しようと努めました。

来日中は、小中高校生による吹奏楽団との交流、計3会場でのトンガ独自の音楽披露にシビタウ講座、メインのKYOとの交流および共演と過密スケジュールでしたが、参加者には非常によい刺激となった10日間でした。また日本人にとってもトンガ人の温厚な人柄や陽気な音楽に触れたことで、トンガという国を知り、好印象を抱いていた大きくきっかけとなったようです。

今企画によりトンガの学生の練習意欲が向上したのはもちろんのこと、最年少だった10代の学生は日本の歴史や文化に特に感銘を受け、将来日本で学びたいという意志を持ちました。また、トンガへ帰国後、今回の参加者とは関係のないトンガ人から「彼らを日本に連れて行ってあげてあげよう」という声をいただき、大変嬉しく思うと共に、トンガと日本という国同士の交流をひとつ達成することができたんだなという実感が湧きました。

今回は本当にたくさんのご協力をいただき実現に漕ぎつけることができました。その感謝の気持ちを忘れることなく、これをはじめの一步として、両国の交流が続いていくよう尽力していきたいと思っています。

※1 Tupou Tertiary Institute. トンガのキリスト教フリーウェリアン教会(メソジスト系)傘下の学校で、数種類の学科から構成される。高校卒業後18歳以上の学生が通う。 ※2 ギターなどは以前からあったため、ここではオーケストラで使用されるヴァイオリンなどの弦楽器を指す。 ※3 主にTTI音楽科の学生で構成される管弦楽団。毎日授業にて練習を行い、冠婚葬祭や国の行事での出張演奏も務める。 ※シビタウ…ラグビー代表が国際試合前に舞う民族舞踊。



授業で相撲を教えている子どもたちが入賞したときの集合写真

日本の裏側にあるブラジルで相撲が行われているとはほとんど誰も想像していなかったことでしょう。ブラジルでは1908年に出稼ぎを目的として渡った日本人移民の方々がスポーツや武道の中で最初に相撲を広めたと言われています。当時は、日本人を中心に試合が行われ、四股名という力士の名前がひとりひとりに名付けられていたくらい盛り上がりを見せていたようです。しかし、現在では相撲で使う用語については日本語が使われているものの、競技人口は年々減少傾向にあり、約400人の日系人やブラジル人が中心となり競技を行っています。

現在、私は、ブラジル・サンパウロ州の各地域を巡回し、相撲の普及活動を行っています。今回はそのうちのひとつの地域について紹介します。この地域では市長や同僚の方々と話し合いを進める中で、相撲を通して子どもたちを教育するプロジェクト



軟らかいボールを両手で持つことで相撲の基本的な姿勢を指導する飯田さん(左端)

大会参加の流れ	
〈11カ月前〉 会議	巡回先地域の市長と会議を行い、相撲のプロジェクトを開始。
〈10カ月前〉 授業	体全体を動かす運動の採用・実施。
〈8カ月前〉 地域大会	プロジェクト開始後初となる地域大会の開催。約100人の子どもが集まった。
〈7カ月前〉 発表会	市長・子どもたち・親・同僚が参加し、今までの成果・目標などについて意見交換。
〈2カ月前〉 会議	今までの活動の反省点・今後の活動について同僚と意見交換。
〈1カ月前〉 大会準備	大会で参加者に配るトロフィーや景品を同僚とともに民間企業からいただく。

相撲を通してブラジルとの懸け橋になりたい。授業の一環として導入された相撲

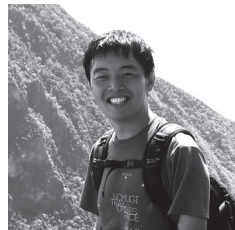
Brazil

文 = 飯田浩之さん(ブラジル・相撲・2018年度1次隊)

クトを始めることになりました。6校の小学校で約150人の子どもたちを同僚の方々と分担しながら指導しています。私が着任する前から少人数で相撲稽古をしていたらしいのですが、着任当初は稽古の始まる前に靴や服を整頓しない子どもが多く見られたので、私は子どもたちに物の大切さを説明し、理解してもらいました。相撲の活動内容は同僚の方々と話し合つ中で決めていき、体全体を動かす相撲に通ずる運動をしていくという目標を立てました。日々新たな運動を考えたいですが、子どもたちの反応が悪い場合もあり、工夫しながら活動しています。

7月20日と21日に国内で一番規模の大きい「第58回全伯相撲選手権大会」が行われ、私の教えている子どもたちも出場しました。プロジェクトが始まってから1年未だで、正直なところ、子どもたちには怪我なく楽しんでもらうことを願っていました。しかし、礼儀正しく、そして柔軟な体になった子どもたちは、精神的、肉体的に強くなり、入賞者が多かったため地域別で総合優勝を獲得することができました。大会後周囲から「日本らしい相撲を教えてくれてありがとう」と言われました。また、配属先は相撲を再び普及させようという意欲をみせています。

今後は、ブラジルのニーズに合わせた相撲の普及活動を行うことで、「ブラジルの相撲」と言われるくらいの発展を期待しています。



内田佳秀さん

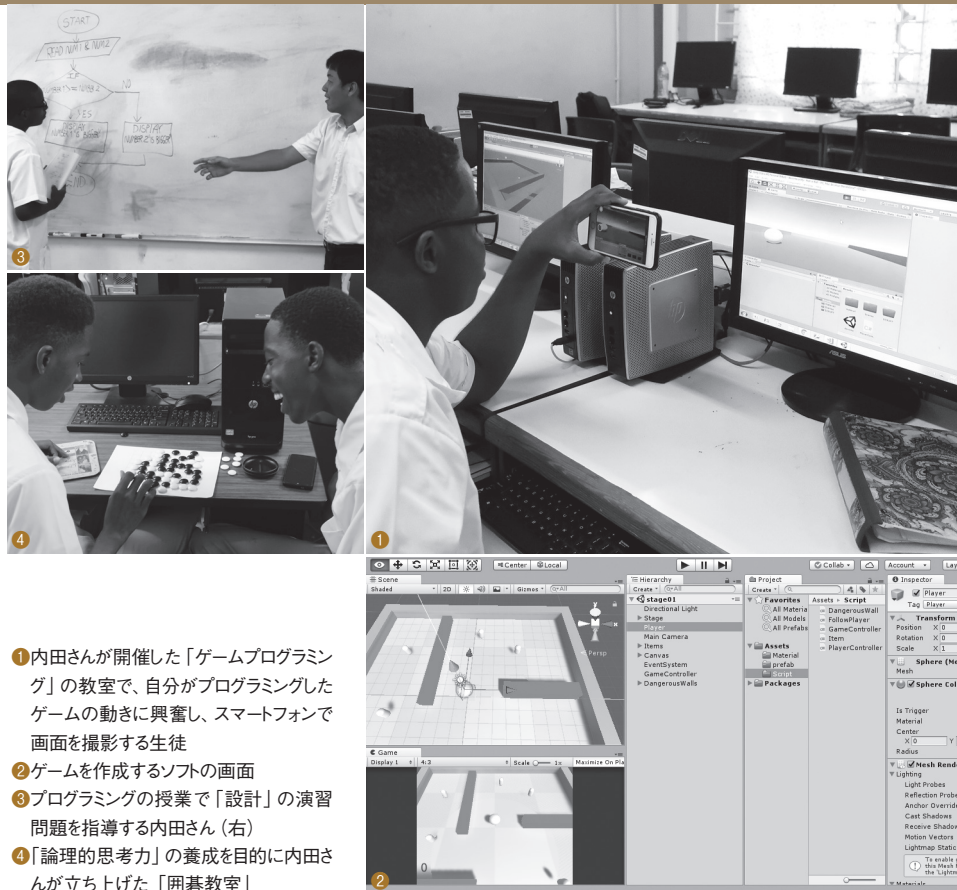
Profile

1988年生まれ、愛知県出身。首都大学東京大学院の修士課程を修了後、自動車電装品メーカーに就職し、組み込みソフトウェアの開発を担当。2017年3月、協力隊員としてセントルシアに赴任。19年5月に帰国。現在は、自動車向けソフトウェアの外資系ベンダーで技術サポートを担当。

活動の概要

セントルシア教育・革新・ジェンダー・持続的開発省のキャリア開発局（カストリーズ郡カストリーズ）に配属され、中等学校のIT教育に関する主に以下の活動に従事。

- プログラミング授業の実施
- 数学の補講の実施
- ゲームプログラミング教室の開催
- 囲碁教室の開催
- 業務改善ソフトウェア（成績表を自動的に作成するソフトウェア）の作成



- 1 内田さんが開催した「ゲームプログラミング」の教室で、自分がプログラミングしたゲームの動きに興奮し、スマートフォンで画面を撮影する生徒
- 2 ゲームを作成するソフトの画面
- 3 プログラミングの授業で「設計」の演習問題を指導する内田さん（右）
- 4 「論理的思考力」の養成を目的に内田さんが立ち上げた「囲碁教室」

CASE 1

中等学校でのIT指導

「ゲームプログラミング」や「数学」など、課外授業を織り交ぜプログラミングを指導

うだよしひで 内田佳秀さん（セントルシア・PCインストラクター・2016年度4次隊）の事例

中等学校のIT科で「プログラミング」の授業を担当した内田さん。生徒たちに「数学の基礎力がない」「プログラミングへの興味が薄い」といった課題があったなか、各種の課外授業を織り交ぜながら技術習得を支援した。

特集 1

IT分野の活動ポイント

IT分野の協力隊員の活動では、ハード面の困難（パソコンや関連機材の充実度などの不足）、あるいはソフト面の困難（現地の人が持つ知識・技術のレベルの不足）など、共通の困難が存在する。そうした課題にどう対処すべきか。タイプの違う活動の事例を通して、そのポイントを整理する。

内田さんが配属されたのは、学校教育のキャリア開発局や教材開発などを所管するセントルシア政府の一部局。メインの活動となったのは、日本の中学1年生から高校2年生までに当たる生徒が通う中等学校3校を巡回し、IT授業で「プログラミング」を教えることだ。

同国の中等学校は、4年時から特定の学科を専攻する仕組みとなっている。内田さんが担当したのは、IT科の4年生の授業。巡回先の同科は、各学年に10人前後のクラスが1つずつあり、専任教員が1、2人ずつ配置されていた。彼らによるプログラミングの授業は、従来、4年生で「プログラムの設計」を教え、5年生で「プログラムの実装」を教えるという流れで行われていた。しかし、この方法では、実装を学ぶときにはすでに設計の知識が薄れてしまっているため、設計も実装も理解が中途半端に終わっていたようだった。そこで内田さんがとったやり方は、1回の授業のなかで設計と実装の両方を扱うというもの。授業の前半で1つのプログラムの設計について解説

し、後半でそのプログラムの実装に取り組ませた。すると、後述のように「数学の基礎力の不足」が足かせとなり、理解が進まない生徒がいた一方で、みるみるプログラミングに習熟していく生徒も現れていた。

巡回先のIT科教員の中には、プログラミングの経験をほとんど持たない人もいた。そこで内田さんは、彼らへの指導にも注力した。内田さんの授業を見学してもらったほか、授業の合間にマンツーマンのレッスンも実施した。そうして任期中に、初學者には難関だが、プログラムの実装で必須な技術の「デバッグ」まで、ひと通りの基礎を伝えることができた。

生徒たちの基礎力の底上げ

内田さんの教え子たちは、プログラミングのベースとなる基礎的能力に課題がある生徒も多かった。「数学力」と「論理的思考力」だ。そこで内田さんは、これらを伸ばすための指導にも取り組んだ。教え子たちの多くに「数学力」が欠け

ていることに気づいたのは、プログラミングの授業を担当し始めて間もなくのこと。「割合」など、小学校で学んでいるはずの概念が理解できていない生徒が見られたのだ。IT科の5年生が受ける全国統一試験では、「値引き計算をするプログラム」なども出題される。そうしたプログラムの知識を蓄えても、「割合」の概念がわからなければつくることはできない。

そうして内田さんは、生徒たちの数学力を上げるための策も講じるようになった。プログラミングの授業では、必要となる数学の知識も丁寧に解説。生徒の数学力がとりわけ低かった巡回校では、放課後に「数学教室」を開催した。内田さんのそうした「手間暇」に比例して、プログラミング授業の定期テストの点数も向上。生徒から数学に関する質問を受けることも増えていった。

一方、生徒たちの論理的思考力の向上を目的に内田さんが実践したのは、「囲碁教室」の開催だ。ここに石を置いたら、次に相手はこんな手を指してくる――。囲碁にはそんな論理的思考力が不可欠であることから、試しに取り入れてみたものだった。生徒たちの論理的思考が実際にどれほど向上したのか、数値で測ることは難しかったが、囲碁教室は後述の「ゲームプログラミング教室」と並び、参加した生徒たちの生き生きとした表情が見られる活動となった。

モチベーションのありか

任期も残すところ4カ月ほどとなった

後援隊員へひとこと

自分の経験や技術を振り返って!

授業を担当するにあたり、何から手をつけ、どんなことを扱い、指導すれば良いのか迷うこともあると思います。そんなときは、自分がそれまでの経験で身につけた技術を見返し、それをどう反映しているかを考えてみてはいかがでしょうか。

ころ、内田さんは授業の合間を使って「ゲームのプログラミング」を教える課外授業を開く活動を開始した。教え子たちに「IT学科を選択した理由」を尋ねてみたところ、「プログラミングへの興味」ではなく、「進学や就職に有利だから」といった実利的な理由を挙げる回答が多かったことから、「プログラミング自体にある楽しさ」を知ってもらうことも必要だと考えて企画した活動だった。

実際に「ゲームプログラミング教室」を開いたのは、巡回先のうち、設置されているパソコンでゲームのプログラミングが可能だった1校。まずは入門編として、パソコン画面のボールをキーボードで操るプログラムのつくり方を指導した。授業で教えた技術を応用すればできるものだ。すると、参加した生徒たちは、プログラミングしたつもりのもので違う動きをボールがすると、飽きることなくプログラムの書き直しを重ねる。そうしてようやくボールが思い描いていた通りの動きを見せたときの生徒たちの喜びの表情は、まさに「プログラミングの楽しさ」を実感したに違いないと確信できるものだった。

*1 プログラムの設計…コンピュータにどのような処理をどのような順番でさせるかを構想すること。
*2 プログラムの実装…つくった設計をもとに、プログラミング言語による記述を行うこと。
*3 デバッグ…プログラムのなかの問題がある箇所を見つけ、修復する作業。

津村さんの配属先は、国内第2の都市にある職業訓練校。機械科や電気科などいくつかの専門学科が設けられ、500人ほどの生徒が在籍していた。津村さんのメインの活動となったのは、全学科の選択科目となっていたITの授業を、カウンターパート（以下、C P）と分担することだ。

配属校の生徒の大半はPCを持っておらず、IT授業を選択した生徒がPCに触れる機会といえば、週に1、2回あるITの授業がすべてという状態。授業で求められていた達成目標は、PC操作の基礎を習得させることだった。IT授業を受講する生徒の人数は、1授業あたり30〜50人程度。それに対し、IT授業を行うPC教室に当初設置され、使用可能だったPCは、わずか9台だった。しかも、週に2度ほどのペースで停電が発生し、一時PCが使えなくなつた。津村さんはそうした状況に合わせて、さまざまな補助教材を開発していった。

停電中にできる指導のための補助教材は、前もって準備しておいた。エクセルなどの操作をわかりやすく説明するための紙芝居などだ。

つくった補助教材のなかでとりわけ効果が高かったのは、ペットボトルでつくったマウスの模型だ。授業中にPCを操作する生徒の手の動きを観察すると、マウスでダブルクリックするときに、1度目のクリックと2度目のクリックの間にマウスを動かしてしまっていたり、ドラック&ドロップの最中にマウスを押す

指を外してしまつたりと、細かな操作が苦手だと感じられる生徒が多かった。そこで、「マウスさばき」の肉体的な訓練をする道具としてつくったのが、ペットボトル製のマウス模型だ。PCが空くのを待つ間などに、それを使って練習をさせた。すると、当初はダブルクリックもおぼつかなくなつたような生徒であっても、1つの学期でマウスの基本操作が難なくできるようになるのだった。

タイピング技術は一生の宝

手元を見ないでタイピングする「タッチ・タイピング」を習得するために作成したのは、キーボードを実寸大でプリンアウトし、「どのキーを、どの指でタイプするか」を色分けで示した補助教材だ。常に人差し指を置いてキーの位置を測る基点とする「人差し指のホームキー（FとJのキー）」には、実際のキーボードと同様、突起を付けた。津村さんはこれを生徒たちに配布し、タッチ・タイピングを指導。しかし、生徒たちはどうしても手元に目をやつてしまつたのだ。

そこで次に試みたのは、実物のキーボードに、手元が見えなくなるカバーを装着し、タイピングの練習をさせるというやり方だ。PCのモニターの背後の壁にはキーボードの絵を貼り、キーの位置を想起する助けとした。当初、その状態でタイピングすることなどできるわけがないという様子を見せていた生徒たちだったが、津村さんがカバーをした状態

のキーボードでタイピングを実演して見せると、生徒たちは驚愕。にわかには練習に熱を入れるようになった。

津村さんは生徒たちに対し、「これからは、どんな仕事もPCを使う時代。タイピング技術を今、習得しておけば、一生の宝になるよ」と声を掛け、鼓舞した。さらに、生徒たちがPCに触れる時間を増やすため、津村さんは空き時間や放課後も可能な限りPC室を離れず、生徒たちにPCを開放したり、メンテナンスをするなどして使えるPCの台数を増やしたり、放課後の遅い時間まで開いている図書室にも数台配置したりした。

生徒たちのタイピングの練習に熱が増すと、津村さんはさらに彼らのモチベーションを高めるため、タイピングの練習に使う無料のソフトを各PCにインストール。表示された文字列を入力していくと、タイピングのスピードが測定されるものだ。そうして、1分間に50文字以上のタイピングができればレベル1、100文字以上ならレベル2というように、習熟度の「ランク」を設定し、学期末試験と同じ時期にタイピングの検定試験を行うことにした。試験を受けた生徒たちには、合格したランクを記載した手づくりの「認定証」を発行。さらに、成績上位者は校内の掲示板に名前を貼り出した。すると、成績上位者を貼り出した直後は毎回、掲示板の前に生徒の人だかりができ、彼らが興味を持って検定試験に取り組んでくれていることがわかった。そうして、津村さんの帰国直前に行われ

た学期末試験の際には、タイピングの検定試験を受験した生徒が皆、最低限の目標としていたレベル1を達成することができたのだった。

C Pも実技重視の姿勢に賛同

C Pを含め、現地の教員たちが行う授業のスタイルは、教員が板書をしながら講義し、生徒たちは板書をノートに書き写して、ひたすら知識を増やしていくというもの。IT授業であっても、学期末の試験は知識を問う筆記のみが行われていた。そうしたなか、津村さんは当初、実技を重視する自分の授業のやり方を、C Pは快く思っていないのではないかと危惧していた。しかし、それは杞憂に終わった。着任から4カ月ほど経ったころから、津村さんが開発する補助教材にC Pが興味を示し、「それはどうやって使うのですか？」などと聞いてくるようになり、やがて彼自身が自分の授業にも取り入れるまでになったのだ。

後輩職員へひとこと

どのような環境の中でもできることは必ずある！
 現地の人たちの役に立つと感じるならば、どんなことでも取り組んで構わないのではないのでしょうか。私は、最悪PCが1台もない状況でも、やれることは必ずあるはずだと思って活動に取り組みました。

CASE 2

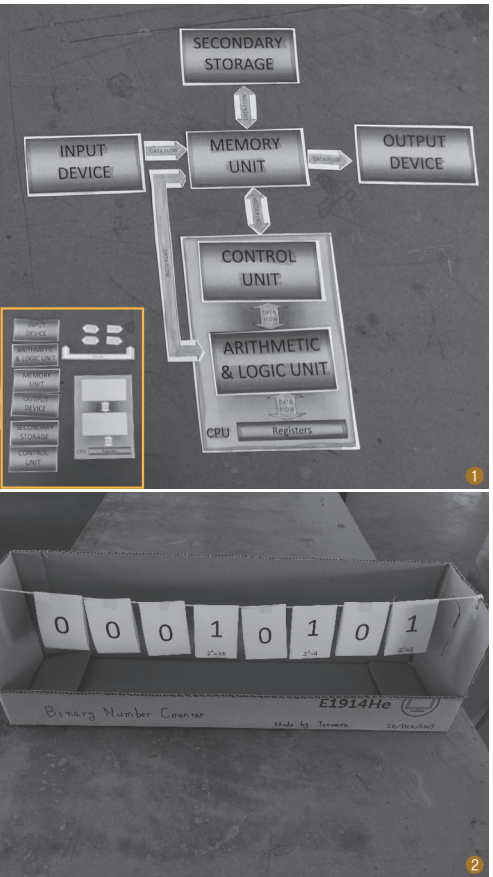
職業訓練校でのIT指導

手づくりの補助教材を開発し、生徒たちの実技の力の向上を後押し

津村実さん

（S/Vサンビア・PCインストラクター・2016年度3次隊）の事例

職業訓練校に配属され、ITの授業を担当した津村さん。PCに触れたことがない生徒たちの実技の力を上げるため、補助教材の開発に工夫を凝らした。



- 津村さんが手づくりした補助教材のひとつである「PC構造パズル」。PC内の部品や、それらの間の関連性を示すカード（左下の囲み内）を並べて、PCの構造を学ぶものだ
- 津村さんが手づくりした補助教材のひとつで、「二進法」を学ぶためのもの。表に「1」、裏に「0」が書かれたカードを並べれば、任意の二進数をつくらせ、十進数への変換をさせていく
- ペーパーキーボードを使い、ホームキーに指を置く練習を行う生徒たち
- タッチ・タイピングの練習のためにキーボードにカバー（手前）を被せたPC



津村 実さん

Profile
 1950年生まれ、大阪府出身。関西学院大学を卒業後、製菓会社に就職し、主にIT関連業務に従事。2015年に退職した後、17年1月、シニア海外ボランティアとしてザンビアに赴任。19年1月に帰国。

活動の概要
 キトウェ職業訓練校（コッパーベルト州キトウェ郡キトウェ）に配属され、主にITに関する以下の活動に従事。
 ●IT授業の実施（扱ったテーマは、ワード、エクセル、パワーポイント、コンピュータ基礎学、タッチ・タイピングなど）
 ●教員やスタッフへのコンピュータに関する技術指導
 ●コンピュータ室の管理・運営
 ●カウンターパートへのSS活動指導

CASE 3

研究施設でのIT環境整備

業務の効率化に向け、現場に合ったやり方でLANやデータベースを整備

かきさこゆうと 垣迫雄斗さん (モザンビーク・コンピュータ技術・2016年度4次隊) の事例

農業の研究施設に配属され、IT環境の整備を担当した垣迫さん。業務でPCが使われているにもかかわらず、ほとんど手付かずの状態だったLANやデータベースの整備に取り組み、業務の効率化を後押しした。



垣迫雄斗さん

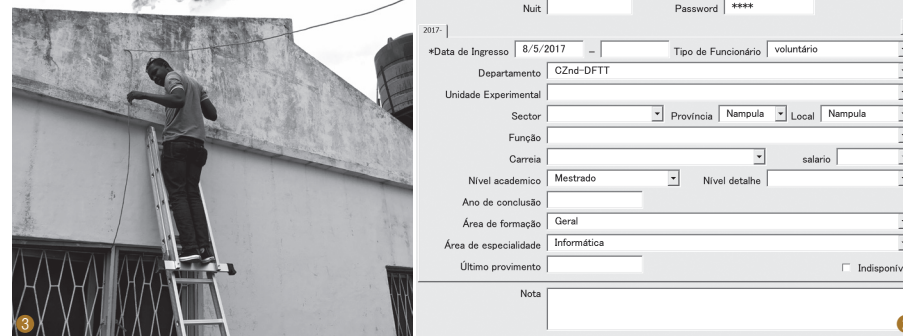
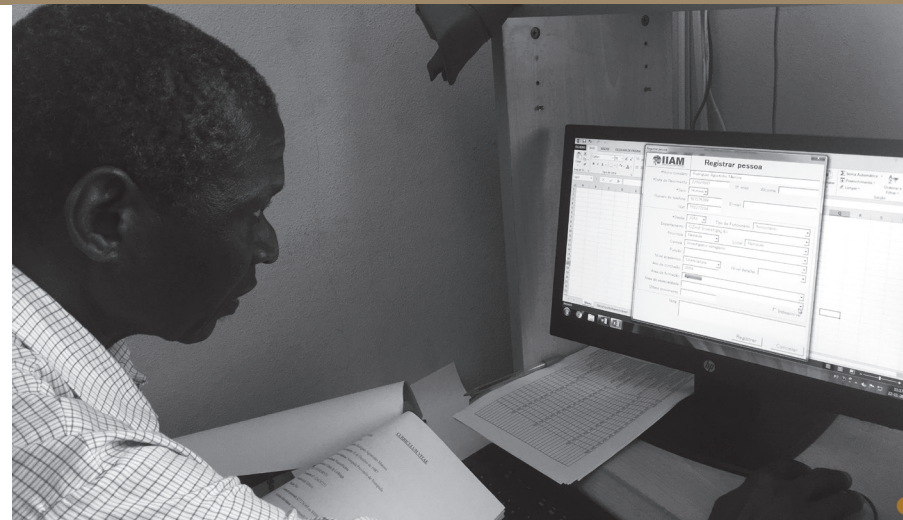
Profile

1983年生まれ、大分県出身。首都大学東京大学院修士課程を修了後、ソフトウェア開発会社に就職。2017年3月、協力隊員としてモザンビークに赴任。19年3月に帰国。現在は日本のNGOに所属し、モザンビークにおけるサイクロン「イダイ」の被災者支援事業の現地調整員を務める。

活動の概要

- モザンビーク国立農業研究所のナンブラ地域農業試験場(ナンブラ州ナンブラ市)に配属され、主に以下の活動に従事。
 - 職員が使うPCの修理
 - LANの構築
 - 人事データベースの構築
 - 研究データベースの構築(未完成)

- 1 垣迫さんがつくった人事データベースを操作する人事部門の職員
- 2 人事データベースの登録画面
- 3 配属先の建物と建物の間にLANケーブルを敷く作業を行う同僚職員



- *1 Wi-Fiルーター…複数の端末をインターネット回線に無線でつなぐ装置。
- *2 LANケーブル…LAN(限られたエリア内のネットワーク)で使われる、PCやプリンタなどをつなぐケーブル。
- *3 GIS…地理情報システム。「人口」など特定の場所の状態を表す情報を、地図の電子データ上に可視化する技術。
- *4 ユーザインターフェイス…機器やソフトを使う際に、利用者が機器やソフトの間で情報のやりとりをする方式。

インターネット環境の整備

垣迫さんが配属されたのは、国立の農業研究機関が有する研究施設。求められた活動のひとつは、ネットワーク環境の整備だ。配属先には研究者と総務を中心とする約60人の職員がおり、個々人が独立してPCを使って業務を行っていた。一方、配属先はSIMカードを用いた携帯電話回線を使用するWi-Fiルーターでのインターネット接続サービスを利用。配属先は、約5ヘクタールの範囲に12の平屋の建物が点在し、2カ所のWi-Fiルーターを用いている。そのため、配属先が契約しているインターネット接続サービスを利用できるのは、ルーターの近くに机があるごく一部の職員に限られている状態だったのだ。

そうして垣迫さんが取り組んだのは、配属先が契約しているインターネット回線を、常時、多くの職員が利用できるように環境をつくること。その際に配慮した点のひとつは、「インターネットの私的利用」である。Wi-Fiルーターの設置数を増やし、配属先内どこにいても無線でインターネットに接続することができれば、利便性は上がる。しかし、そうすると、職員がそれぞれのスマホを常時インターネットにつなぐようになり、私的利用に歯止めがかからなくなってしまう。結果、回線が混雑し、業務に差し障りが出てしまうことが予想された。

そこで垣迫さんが選択したのは、配属先が共有する「データベース」の導入だ。垣迫さんが配属先から要望を受けて構築し、活用が定着したデータベースは、職員の名前や住所など人事情報を集約した「人事データベース」である。配属先では従来、人事情報は人事部門と研究部門が別々のエクセルファイルに入力、管理していた。そのため、一方のみで更新がなされるなどして、両者の情報の間には食い違いが生まれていた。人事データベースをつくることで、両者の情報を一元的に管理すれば、そうした問題の発生は防ぐことができる。幸い、人事部門の職員たちが働いているのは、LANケーブルの敷設が完了した棟だった。

垣迫さんは人事データベースの構築にあたり、配属先の職員たちにとって使いやすいものになるよう、次のような工夫をした。

■データベースソフトの選択
配属先の負担が軽くなるよう、使うデータベースソフトは無料のものにすることとしたが、実際に選んだのは「PostgreSQL」というソフト。将来的に配属先の研究者が使っていたGISのデータも格納することができる点に着目してそのデータベースを選択した。

■ユーザインターフェイスの選択
配属先の職員がもっとも使い慣れていたソフトは、ワードやエクセル。そこで、

先内にLANケーブルを張り巡らせ、有線インターネットに接続できるようにするというやり方だ。垣迫さんはGoogle Earthの航空写真を使い、配属先の12の建物の間に渡すケーブルの長さを算出するなどして、必要な物品の見積もりを作成。しかし、それをカウンターパート(以下、CP)にあたる総務部門の幹部に提出したところ、「予算不足」との理由で却下されてしまった。思いがけず状況が打開できたのは、それから半年ほど後のことだ。インターネット環境の整備が頓挫していることを、CPの上司に当たる配属先のトップに相談したところ、描いたプランの意義を理解し、必要な物品の購入を即座に了承してもらったことができたのだ。限られた予算のなか、建物の壁に穴を開け、LANケーブルを通す作業などは、外部の業者に外注せず、PCに強い同僚職員と垣迫さんがこなした。そうして任期中に実現が叶ったのは、プランの6割程度。配属先の12の建物のうち、9棟の間をLANケーブルでつなぎ、うち4棟では建物内のすべてのPCにLANケーブルを張り巡らせることができた。

人事情報データベースの構築

LANケーブルの敷設が完了した4棟では、そのネットワーク内にサーバーとしての役割を持たせたPCを配置し、共有フォルダやプリンタなどもつなぎ、人事情報の登録更新や閲覧のための検索などの操作をするユーザインターフェイスには、さまざまなプログラミングを施した専用のエクセルファイルをつくり、それを利用してもらうこととした。

「表記のゆれ」への対応

配属先の職員たちが使うポルトガル語のアルファベットには、「アクセント記号」がある。しかし、キーボードでそれらを入力する方法がわからず、PCで入力する際はそれらを省いてしまう職員もいた。そこで垣迫さんは、検索キーワードとして入力した単語にアクセント記号があってもなくても同じ検索結果が得られるよう、データベースに関数を作成し、システムに組み込んだ。

人事データベースの完成は、垣迫さんの帰国の約半年前。主に活用する人事部門の職員5人を対象に、使い方を伝える研修を開いた。幸い、帰国の3カ月前に同部門のトップに着任した人物がこのデータベースの意義にとりわけ強い理解を示し、運用が確実に定着していった。

後輩隊員へひとこと

新たに導入する仕組みは、現地に合ったものに!

活動先にITの新たなシステムを導入する際、それがいかに有益なものであっても、使い手となる人たちが操作に手こずるようでは、活用の定着は望めないでしょう。そのため、あらかじめ彼らのスキルをしっかりと把握しておくことが不可欠だと思います。

PCの修理部品の購入について

アフリカでIT教育に取り組む
隊員より

配属先に故障しているPCがあるので、修理部品を自費で購入すべきか、配属先の自助努力を促すために買わずにいるべきか、迷っています。故障しているPCが直れば活動の幅が大きく広がり、生徒がよりPCを使いこなせるようになると思います。しかしその一方で、配属先には「隊員に備品を寄贈してもらおうのは当然」という精神が少なからずあるように見え、それを助長することを危惧しています。



回答者
さくらいひろひろ
桜井人広さん
●JICA海外協力隊技術顧問
(担当分野: 情報通信技術(コンピュータ技術))
●株式会社TOKYO 代表取締役

確かにそのとおりですね。セオリーとしては、配属先に備品購入をお願いするべきですが、やはり資金面で困難を抱えている配属先では対応が難しく、自助努力ではどうしようもないケースも少なくないと思います。
私は、隊員個人で賄える範囲で、それほど大きな金額でなければ、自分で購入してしまうのもありだと考えます。備品を買って配属先に与えるだけでは、単なる「寄贈」に終わってしまいますが、買った備品の活用までフォローするならば、「寄贈」ではなく「投資」になるという考え方もできますね。
投資に対するリターンは、生徒がPCを使えるようになり、将来、安定した収入が得られるようになること。そして、その収入により、生徒の子供によりよい教育を与えるチャンスが増えることも期待できます。備品そのものは5年もすれば使えなくなりませんが、将来のことも考えると、比較的大きなリターンが期待できます。

特集1 IT分野の活動ポイント

協力隊
技術顧問が
回答

活動 Q & A 集

JICA海外協力隊への技術支援を目的に、分野ごとに配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。

ITを活用した教材づくりについて

中等学校でIT教育に取り組む
隊員より

中・高校生に対するIT教育の補助教材の作成を始めました。赴任したばかりでまだまだ語学レベルが低く、教材づくりに時間がかかるので苦労しています。

ITを活用して効率よく教材をつくれればと思うのですが、良い方法があれば教えてください。

インターネットが利用できる環境にあることが前提になりますが(これが問題となるケースも多いと思いますが)、日本語で説明されたHPをGoogle Chrome(以下、Chrome)の機能を使って任国の言語に翻訳するという方法が、補助教材をつくるうえで役立つかと思えます。

1 素材の収集
補助教材の素材となりそうな日本語で説明されたHPを、インターネッ

トで検索して見つけ出します。このとき、ウェブブラウザはChromeを使ってください。

2 翻訳
見つけたHPが補助教材の素材となることを確認したら、以下の手順で翻訳します。英語だけでなく、多言語(フランス語やアラビア語など)に翻訳可能です。多少誤訳も見られますが、十分に利用可能です。

●Chromeの右上にある「設定ボタン」(⋮)を押下し、さらに「プルダウンされたリストから「設定」を選択します。
●左に表示された設定メニューの一番下にある「詳細設定」を選択し、下位メニューを展開します。
●「言語」の設定項目のうち、「母国語以外のページで翻訳ツールを表示する」を「ON」にすれば、翻訳機能が有効になります。

●「言語」の設定項目のうち、翻訳したい言語(英語)など)を選んで右端の「設定ボタン」(⋮)を押下し、「この言語のページで翻訳ツールを表示する」を「ON」にします。ここまでが事前設定です。
●翻訳対象HPを開き、URL入力エリアの右端にある「このページを翻



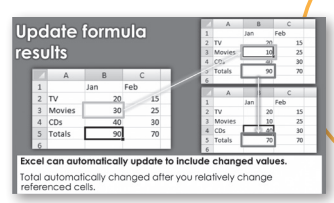
回答者
よつもとかずひろ
四元一弘さん
●JICA海外協力隊技術顧問
(担当分野: 情報通信技術(PCインストラクター))
●株式会社ゼネット 代表取締役社長
(ITコンサルタント)

訳「ボタン」(⋮)を押すと、数秒でHPが翻訳されます。
3 PDF化と編集
翻訳されたHPを開いた状態で「印刷」のダイアログボックスを出し、「送信先」に「PDFに保存」を選択して「保存」ボタンを押下すると、翻訳されたPDFファイルが手に入ります。
さらに編集を加えたい場合は、PDFの文字をカット&コピーでWord等のファイルに貼りつけ、そのファイル上で編集します。
4 活用事例
たとえば、日本語によるIT学習のeラーニング教材も、現地語に自動翻訳して活用することができます。英語に自動翻訳し、留学中のフィリピン人に提供した際には、十分に効果を上げることができました。

ボランティア成果品 Pick Up (IT分野)



『COMPUTER HARDWARE』
作者: ガーナのPCインストラクター隊員
内容: 職業訓練校におけるIT授業の生徒に向けた、PCのハードウェアに関する動画教材。PCのハードウェアの基本知識や修理方法について解説する。
形態: MP4・英語
構成: [PCとは] [PCの操作方法] [PCの修理方法] など



『Lecture Plan』ほか
作者: タンザニアのPCインストラクター隊員
内容: 専門教育機関におけるIT授業の教員向け資料。WordやExcelの使い方を教える授業の「カリキュラム案」と「プレゼンテーション資料」からなる。
形態: Excelファイル(カリキュラム案)とPowerPointファイル(プレゼンテーション資料)・英語

[IT分野の他の登録例]

- 『Computer studies』
中高校におけるIT授業のプレゼンテーション資料 (PowerPointファイル・英語/作=ケニアのPCインストラクター隊員)
- 『INTRODUCTION TO PC』
職業訓練校におけるIT授業のプレゼンテーション資料 (PDFファイル・英語/作=ナミビアのPCインストラクター隊員)
- 小テスト集と練習問題集
中高校におけるIT授業の小テスト集と練習問題集 (WordファイルとExcelファイル・英語/作=ナミビアのPCインストラクター隊員)
- 練習問題集
小学校におけるIT授業の練習問題集 (PDFファイル・スワヒリ語/作=タンザニアのPCインストラクター隊員)
- Wordによるポスター作成のマニュアル
Wordでポスターのデザインを作成する方法のマニュアル (Wordファイル・英語/作=ソロモンのPCインストラクター隊員)

また、隊員本人が投資のリターンを得るためにも、いろいろと策を考えることになります。
購入した備品をどう活用するか? 紛失や故障がないように配属先でどう管理してもらうか? それらを行動に移していけば、活動の幅も広がります。また、隊員の活動が進むにつれて、周囲の方に隊員活動への理解が進み、更なる支援が得られることもあります。
過去には、最後まで配属先の自助努力にこだわった隊員もいました。その最終報告書では、「あの時、自分のお金で備品を買ってあげば、もっといろいろな活動ができた。活動期間が2年間と限られていたなか、無駄に過ごす時間を少なくすることもできた……」と後悔されています。
もちろん、「備品を自費で購入する/しない」という問題の正解はないのですが、多くの隊員の経験からアドバイスすると、自費での購入もありと考えます。
ただ、「投資」には失敗するリスクもあるので、そこは、失敗しても痛くない程度の出費に抑えておきましょう。

木さんばかりが抜き出ているということだ

その後、根木さんは講習会の開催やOJTに

根木さんの事例の Point

「横並び意識」へ揺さぶり
 「皆ができないから、自分もできなくて構わない」。そう安住している同僚たちに揺さぶりをかけることは、外部者である協力隊員に果たせる役割だろう。目を引くにかしらの技術を示せば、技術向上への努力を始める同僚が現れるかもしれない。

- 1 HEC-RASとArcGISを使って根木さんが同僚とともに作成した洪水のハザードマップ。地図上に吹き出しで場所ごとの対策方針を表示している
- 2 洪水の危険がある地域に赴き、住民(左)に河川の氾濫時の状況などについて聞き取りを行う根木さんの同僚たち
- 3 河川のプロファイルを作成するため、水深などに関する簡易調査を行う根木さんの同僚たち
- 4 タイのアジア工科大学で開催された洪水予測シミュレーションの研修
- 5 配属先の同僚を対象に洪水予測シミュレーションの講習会を行う根木さん

* 地理情報システム(GIS)…GISは「Geographic Information System」の略。「人口」など、特定の「場所」と関連した情報(地理情報)を「地図」のデータに組み込み、地図上で地理情報を視覚的に表示することができるようにする技術。

「横並び」への安住からの脱却

意識」にあると根木さんは感じた。同僚たちを取りまとめるチームエンジニアでさえ、「HEC-RASは難しいから、使えるようにならなくても仕方ない」といったあきらめの姿勢を見せるのだった。

「横並び意識」も崩れ始めた。チームエンジニアは、使いたいソフトウェア、対象地域の住民へのアンケートの集計に同僚たちが扱えない「ピボットテーブル」というエクセルの機能を使うなどしたことから、作業が大幅にはかどり、2週間ほどで完了した。

よって、同僚たちへの技術指導を継続。そのやり方のなかで、意図したわけではないが、結果的に彼らの「横並び意識」をさらに揺さぶる効果があったのは、全員に同じことを教えるのではなく、各人の得意・不得意を踏まえ、教えることをそれぞれ変えるというものだ。

洪水対策の立案に必要なソフトの技術を指導

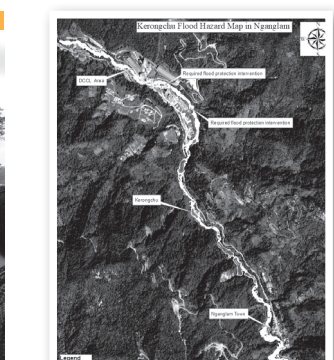
中央省庁の洪水対策担当部門に配属された根木さん。洪水対策の立案に必要な専門性の高いソフトの活用を、「難しい」との理由であきらめていた同僚たちだったが、彼らの技術向上への意欲を刺激したのは、すばやく習得してみせた根木さんの姿だった。

根木さんは、HEC-RASやArcGISなど専門性の高いソフトだけでなく、ワードやエクセルなどベーシックなソフトの有用な機能なども、同僚たちが知らないものはなるべく伝えるよう努めた。しかし、全員を集めて講習会を開く頻度には限りがあったことから、「ワードの技術はこの同僚に伝える。など、技術の種類ごとに伝える相手を決め、業務の手が空いた時間を狙ってその「担当者」にマンツーマンのOJTをした。そのうえで、他の同僚からなにかしらの技術について、「こを教えてほしい」という依頼があった場合は、その技術に関する「担当者」に尋ねるよう促した。すると、根木さんから教わったことを他の同僚に教えることが「担当者」にとって復習の機会になったほか、「この分野に精通しているのは自分だ」という自尊心を刺激し、その技術をさらに伸ばすために努力しようという「担当者」の意欲へとつながっていったのだった。

そうしたなかで変化のきっかけが訪れたのは、着任の約3カ月後。国連の気候技術センター・ネットワークの支援により、タイ・アジア工科大学の教員が講師となって主にHEC-RASの使い方について教える研修を、配属先の全エンジニアが受けることとなったのだ。そこに根木さんも参加することができた。

この一件により、同僚たちの根木さんを見る目がにわかに変わっただけでなく、彼らの「横並び意識」も崩れ始めた。チームエンジニアは、使いたいソフトウェア、対象地域の住民へのアンケートの集計に同僚たちが扱えない「ピボットテーブル」というエクセルの機能を使うなどしたことから、作業が大幅にはかどり、2週間ほどで完了した。

組んだのは、洪水対策の立案に必要な技術を同僚たちに伝えることだ。着任後、根木さんが手始めに開始したのは、「ArcGIS」という地理情報システム(GIS)のソフトの使い方を教える定期講習会だ。洪水予測シミュレーションの結果をArcGISに取り込めれば、洪水対策の事業で不可欠な「ハザードマップ」を容易に作成することができる。しかし、このソフトも配属先に導入されていたにもかかわらず、やはり使える同僚がいなかった。根木さんはHEC-RASを使ったことはなかったが、ArcGISは派遣前の仕事で慣れていたことから、その指導から活動を始めるとにしたのだった。



CASE 1 行政分野

根木和幸さんの事例 (ブータン・防災・災害対策 2017年度1次隊)



根木さん基礎情報

PROFILE

1987年生まれ、大阪府出身。大学院工学研究科の修士課程(土木工学専攻)を修了した後、建設コンサルティング会社に4年あまり勤務。2017年7月、協力隊員としてブータンに赴任。19年7月に帰国。

活動概要

- 同僚への技術指導(洪水予測シミュレーション、地理情報システムなど)
- オンライン・データベースの開発
- 配属先が進める各種プロジェクトの支援

根木さんが配属されたブータン公共事業省技術支援局洪水技術管理課は、河川の洪水対策の立案やその実施を行う機関だ。着任当時、同課に配置されていたエンジニアは7人。いずれもJICAの技術協力プロジェクトの研修などで洪水対策の立案に必要な技術の基本を学んでいたが、実務経験が薄く、学んだ技術が活用されないままになっていた。たとえば、河川の水位や流域の浸水状況が雨量によってどう

変わるかを予測する「洪水予測シミュレーション」の技術。洪水対策の立案では不可欠な作業であり、「HEC-RAS」という専用ソフトの使い方を同僚たちは研修で学んでいた。しかし、実務で使いこなせるようになろうという意欲を持つ人がおらず、配属先に導入されていたHEC-RASは宝の持ち腐れになってしまっていた。

同僚たちは、根木さんの講習会に足を運んでくれた。しかし、ArcGISを実務で使えるようになるためには、講習で学んだ知識をもとに、操作の練習を重ねることが不可欠。同僚たちはその労を惜しんだ。「困難を乗り越えて、新たな技術を習得しよう」という意欲を阻んでいる原因は、「皆ができないのだから、自分もできなくて構わない」という、彼らの「横並び

意欲の引き出し方

同僚や教え子、あるいは任地の住民などに対し、彼らを持たない知識や技術を伝えることは、協力隊員の活動の柱。しかし、知識や技術を習得するための労力を割く意欲を持ってもらうことは、かならずしも容易ではない。そうした困難は、どのような対策が有効なのか? 実践事例を通じてポイントを拾ってみる。

CASE 2 保健・医療分野

武内美樹さんの事例
(スーダン・理学療法士・
2016年度4次隊)



武内さん基礎情報

PROFILE

1983年生まれ、山口県出身。大学の理学療法学科を卒業後、子どもリハビリテーションを実施する施設に理学療法士として10年間勤務。2017年3月、協力隊員としてスーダンに赴任。19年3月に帰国。

活動概要

- NGOが運営する障害児支援施設「ハルツーム・チェシアホーム」(ハルツーム)に配属され、理学療法に関する主に以下の活動に従事。
- 治療の実施
- 同僚を対象にした勉強会の開催
- 近隣の障害児支援施設での技術指導

武内さんが配属されたのは、身体障害児に義肢装具の支給や理学療法を行う施設。スーダン国内には子どもの理学療法を引き受ける施設が少ないため、遠方の子どもも利用できるよう、宿泊設備も備えられていた。患者数は、平均で一日50人程度。8割は脳性麻痺の子どもだ。理学療法部門のスタッフは6人。学校で理学療法を学んだことがあるのは、武内さんのカウンターパートとなった女性(以下、C.P.)だけで、残りは実務のなかで技術を身につけていった人たちだった。同僚たちは、待っている患者を放っておくことなどはせず、勤勉に働いていた。課題だったのは、理学療法の質だ。症状を評価し、適切な治療方法を選択するというプロセスが欠落しており、症状の違いに関係なく画一的な治療がなされていた。そのため、治療の効果が見られない患者も少なくない。C.P.もその例外ではなかった。

そうして武内さんは、「スタッフとして患者の治療に携わるかたわら、同僚たちに理学療法の技術を伝える勉強会を開くようになった。着任して半年ほど経ったころのことだ。同僚たちにアンケートをとり、武内さんにとどのような活動を望むかを聞いたところ、「せっかく日本人が来たのだから、いろいろな技術を学びたい」との声があった。あなたがきっかけだった。しかし、「技術を学びたい」という声は、「社交辞令」だったのかと疑ってしま

能力が与えられているわけではない。彼女たちは彼女たちなりに精いっぱいやっているのです」

C.P.のこの言葉を聞き、同僚たちに直接働きかけても埒が明かないと感じた武内さんは、「間接的」な働きかけに望みを託すことにした。知恵を絞って患者への治療を行い、患者やその家族に「あなたの治療はすばらしい」と喜んでもらう。理学療法にあるそんな本質的な楽しさを、武内さん自身が患者の治療を行うなかで体現し、そこから同僚たちを刺激しようと考えたのだ。

患者の症状を評価し、適切な治療方法を選び出す。あるいは、治療方法や回復具合について患者の母親に丁寧に説明をする。同僚たちとは異なるそうしたやり方の治療を重ねていくと、やがて患者の母親のなかに、同僚たちによる治療を拒み、武内さんを指名する人が現れてきた。すると同僚たちはようやく、武内さんから技術を学ぼうとする姿勢を見せるようになっていく。勉強会では、集まるまでの時間が短縮。さらに、勉強会で学んだ技術を実践する同僚たちも現れるようになり、武内さんの隣で別の患者への治療にあたる同僚から、「これはミキの真似をしているのよ」「こんな感じがいいのしょう？」などと声をかけられることも出てきた。

「予約制」の導入で余力を捻出

同僚たちは従来、「仕事の量が多い」と嘆いていた。そう感じている限り、勉強会への参加をはじめ、費やす労力を増やして自分の技術を高めようと思ってもらうのは難しい。そう考えて武内さんが提案し、実現が叶ったのは、受付方法を「予約制」に変えることだ。

従来の受付方法は「受付順番制」。当日、受付簿に名前を書いた順に治療を受けることができるといふやり方だ。同僚たちは一日に治療する患者の人数に上限を設けることはしていなかった

う日々が続いた。勉強会の時間になっても同僚たちが集まらないため、ひとりひとりに声をかけて回らなければならない。それでも集まらないため、流れてしまうこともたびたびだった。勉強会の最中も、武内さんのアラビア語がおかしいと言って茶化すなど、講義の内容を理解しようという意欲が感じられない。実際、彼女たちが行う治療に勉強会の成果が見て取れることはなかった。

理学療法の楽しさを「背中」で伝える

武内さんは、同僚たちに「自分の技術を高めよう」という意欲を持ってもらうための策を試みるようになったが、一筋縄ではいかなかった。たとえば、勉強会をよりわかりやすいものにしようと、教材に動画を使ってみた。しかし反応は薄い。配属先を統括する施設長から発破をかけてもらおうと、勉強会の見学を依頼してみても、叶わなかった。同僚たちは施設長を「現場のことをよくわかっていないのに、きついことばかり言う」という目で見ており、両者の間の溝が深かったのだ。

思い切ってC.P.に「勉強会での同僚たちの態度はあまりにひどいと思う」と相談したこともある。するとこんな答えが返ってきた。「あなたは大学で理学療法を学ぶことができたし、能力もある。同僚たちにはあなたと同じような機会やため、日によって患者の人数に差があり、「忙しい」と同僚たちが感じるのも無理ないほど多い日もあった。「予約制」の導入は、日ごとの患者の人数を平均化するための策である。

時間の感覚がおおざっぱな同僚たちが、細かいスケジュールをこなしていけるとは考えられなかったことから、「どの『日』に治療を受けるか」ではなく、「どの『日』に治療を受けるか」だけを予約してもらう方式を選択。一日に治療する患者の人数に上限を設け、それを超えて予約を受け付けることはしないようにした。

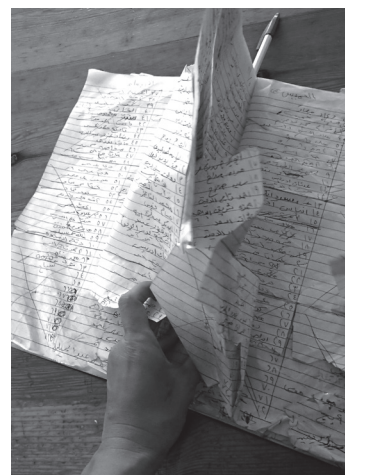
予約を入れるタイミングは、治療が終わって帰る際とし、患者の母親に、予約台帳の次の希望日の欄に名前を書いてもらった。予約制を導入した当初は、武内さん自身が一日中受付窓口に座り、母親たちに台帳への記入を促した。しかし、1、2週間もすると、母親たちが「あなたは治療をやつて。予約の受付は私たちがするから」と要望。以後、予約の受付は、子どもの治療のために配属先に長期滞在している母親たちが担当してくれるようになった。



武内さんの事例の Point

仕事の楽しさを伝える

同僚たちに技術向上の意欲が見られない場合、その仕事に備わる本質的な楽しさを知らないことが要因になっている可能性もある。隊員自身がそれを感じながら働く姿を見せることで、同僚たちの気づきを促すことができるかもしれない。



予約制の導入により受付窓口に着かれるようになった予約簿

理学療法の専門性が 乏しい同僚たちの 技術向上を支援

障害児を支援する施設に配属された武内さん。理学療法部門の同僚たちは、専門教育を受けていない人が大半だったなか、自ら患者の治療にあたりながら、「背中」で思いを伝えていった。



- 1 配属先の理学療法室。ここで同僚たちが並んで理学療法を行う
- 2 配属先の宿泊部屋。ベッド数に限りがあるため、患者と付き添いの母親がひとつのベッドで寝る
- 3 配属先で理学療法を行う武内さん。患者に付き添う母親とのコミュニケーションを密にし、信頼関係を築いていくことも、同僚たちに伝えようとした技術のひとつだ

岩田さんが配属されたのは、ムジンバ県のチカンガワという地域を管轄するヘルスセンター。約1万人の地域住民を対象に、外来診療やHIVの検査・治療といった医療サービスの提供、および乳幼児の健診・予防接種や住民への健康教育などの地域保健事業を行う機関だ。チカンガワは標高1700メートルの高地に位置し、林業が盛んな地域。材木を運ぶ長距離トラック運転手を相手に性産業従事者が商売をする酒場が存在することなどから、HIVの感染率が高くなっていた。そうしたなかで岩田さんのメインの活動となったのは、HIVの感染率を下げるための啓発活動や、HIV陽性者を支援する活動である。

岩田さんは当初、商品の製造技術に関して「改善すべきポイント」ばかりをメンバーたちに伝えた。すると、嫌気が差してグループを離れてしまうメンバーが現れてしまった。そこで、「出来栄の良い点をほめつつ、併せて改善点を指摘する」という方法に変更。するとメンバーたちは、改善に意欲的になっていく。そうして上達実感できるようになると、彼らは手仕事自体の楽しさに目覚め、技術の向上にま

「売れる」という事実である。その実績を一刻も早く上げることが大切だと考えた岩田さんは、グループがつくった商品の質がまだ高くない時期から販路を開拓。チカンガワから車で1、2時間ほどの観光地や都市にある土産物店などで委託販売してもらったところ、外国人観光客に売れた。伝統布によって「現地感」が備わりつつ、かさばらない品物であることから、土産物に適しているようだった。

とは言い、類似の商品を製造・販売している人はほかにもおり、売れ行きを上げるためには、やはり商品の質を高めていかなければならない。そこで次の課題となったのは、「もっと上手につくれるようになる」という意欲をメンバーたちに持ってもらうことだった。

当初、手工芸品づくりに対するグループのメンバーたちの意欲は、決して高いものではなかった。「動物のぬいぐるみ」を筆頭に、岩田さんが提案する商品は、いずれもメンバーたちには「人を買ってもらえる」とは思えないものだったからだ。そんな彼らの意欲を引き出したのは、「売れる」という事実である。その実績を一刻も早く上げることが大切だと考えた岩田さんは、グループがつくった商品の質がまだ高くない時期から販路を開拓。チカンガワから車で1、2時間ほどの観光地や都市にある土産物店などで委託販売してもらったところ、外国人観光客に売れた。伝統布によって「現地感」が備わりつつ、かさばらない品物であることから、土産物に適しているようだった。

岩田さんは任期中、陽性者グループ以外にもチテンジを使った手工芸品の製造・販売を勧めた相手があった。地域の酒場で働く性産業従事者たちだ。しかし、彼女たちから取り組む意欲を引き出すのは難しかった。HIVへの感染のリスクが高い性産業から抜け出したいという希望は高いもの、おしなべて集中力を長い時間持続させることが苦手で、手工芸品を完成させることが困難だったのだ。一方、農業のようにすぐに収入に結びつかないような仕事も、意欲を持ってもらうことができない。そうしたなか、彼女たちにはどのようなタイプの作業が向いているかがようやく見えたのは、岩田さんの任期の終わりが近づいたころだった。ドーナツや菓子パンの製造・販売である。性産業従事者たちにつくり方を教えてみたところ、一部がこれを継続。なかには、「中等学校への復学」という目標を立てて、この仕事に本腰を入れ始める人も見られたのだ。

岩田さんの事例の Point

まずは売ってみる

物の製造・販売に初めて挑戦する人にとって、「自分がつくった物が売れる」という喜びこそ、製造技術をさらに高めようという意欲の元となる。「まだ製品の質が高くない時期であっても、試しに売ってみる」というのも、ひとつの手だろう。



1 陽性者グループのなかには、メンバーから預金としてお金を集め、メンバーへの小口融資を行う「ピレッジバンク」を始めたところもあった。写真は、預金や通帳をしまう金庫を開け、預金や融資の手続きをしている様子
2 陽性者グループの代表者を対象に行った、エイズ・ピア・エデュケーターを養成する研修
3 手工芸品の製作に取り組み陽性者グループのメンバーと、その指導を行う岩田さん（左から2人目）



*1 抗レトロウイルス療法…Antiretriviral Therapy (ART)。複数の薬を併せて服用するHIVの治療方法。
*2 エイズ・ピア・エデュケーター…HIV陽性者の仲間（ピア）のなかで、HIV／エイズに関する知識の伝手になる人。

後者の活動のメインとなったのは、HIV陽性者の自助グループを立ち上げ、その運営を支援することだ。HIV陽性者たちが健康や生活の悩みを分かち合ったり、栄養摂取や服薬など健康の維持・向上に必要な知識を共有したりする自助グループが、岩田さんの着任当時、マラウイの他地域には多く存在していたが、チカンガワにはひとつもなかった。岩田さんは、抗レトロウイルス療法を配属先で受けている

HIV陽性者グループの立ち上げ

岩田さんが配属されたのは、ムジンバ県のチカンガワという地域を管轄するヘルスセンター。約1万人の地域住民を対象に、外来診療やHIVの検査・治療といった医療サービスの提供、および乳幼児の健診・予防接種や住民への健康教育などの地域保健事業を行う機関だ。チカンガワは標高1700メートルの高地に位置し、林業が盛んな地域。材木を運ぶ長距離トラック運転手を相手に性産業従事者が商売をする酒場が存在することなどから、HIVの感染率が高くなっていた。そうしたなかで岩田さんのメインの活動となったのは、HIVの感染率を下げるための啓発活動や、HIV陽性者を支援する活動である。

岩田さんが配属されたのは、ムジンバ県のチカンガワという地域を管轄するヘルスセンター。約1万人の地域住民を対象に、外来診療やHIVの検査・治療といった医療サービスの提供、および乳幼児の健診・予防接種や住民への健康教育などの地域保健事業を行う機関だ。チカンガワは標高1700メートルの高地に位置し、林業が盛んな地域。材木を運ぶ長距離トラック運転手を相手に性産業従事者が商売をする酒場が存在することなどから、HIVの感染率が高くなっていた。そうしたなかで岩田さんのメインの活動となったのは、HIVの感染率を下げるための啓発活動や、HIV陽性者を支援する活動である。

CASE 3 収入向上分野

岩田 彰亮 さんの事例 (マラウイ・感染症・エイズ対策・2017年度1次隊)



岩田さん基礎情報

PROFILE

1984年生まれ、岐阜県出身。大学院修士課程を修了後、国際協力団体勤務を経て、2017年7月に協力隊員としてマラウイに赴任。19年7月に帰国。

活動概要

- チカンガワヘルスセンター(ムジンバ県チカンガワ)に配属され、主に以下の活動に従事。
- HIV陽性者グループの支援
- 地域住民などを対象としたエイズの予防啓発イベントの開催
- 小・中学校におけるエイズの予防啓発授業の実施
- 性産業従事者の支援

岩田さんは任期中、陽性者グループ以外にもチテンジを使った手工芸品の製造・販売を勧めた相手があった。地域の酒場で働く性産業従事者たちだ。しかし、彼女たちから取り組む意欲を引き出すのは難しかった。HIVへの感染のリスクが高い性産業から抜け出したいという希望は高いもの、おしなべて集中力を長い時間持続させることが苦手で、手工芸品を完成させることが困難だったのだ。一方、農業のようにすぐに収入に結びつかないような仕事も、意欲を持ってもらうことができない。そうしたなか、彼女たちにはどのようなタイプの作業が向いているかがようやく見えたのは、岩田さんの任期の終わりが近づいたころだった。ドーナツや菓子パンの製造・販売である。性産業従事者たちにつくり方を教えてみたところ、一部がこれを継続。なかには、「中等学校への復学」という目標を立てて、この仕事に本腰を入れ始める人も見られたのだ。

岩田さんは任期中、陽性者グループ以外にもチテンジを使った手工芸品の製造・販売を勧めた相手があった。地域の酒場で働く性産業従事者たちだ。しかし、彼女たちから取り組む意欲を引き出すのは難しかった。HIVへの感染のリスクが高い性産業から抜け出したいという希望は高いもの、おしなべて集中力を長い時間持続させることが苦手で、手工芸品を完成させることが困難だったのだ。一方、農業のようにすぐに収入に結びつかないような仕事も、意欲を持ってもらうことができない。そうしたなか、彼女たちにはどのようなタイプの作業が向いているかがようやく見えたのは、岩田さんの任期の終わりが近づいたころだった。ドーナツや菓子パンの製造・販売である。性産業従事者たちにつくり方を教えてみたところ、一部がこれを継続。なかには、「中等学校への復学」という目標を立てて、この仕事に本腰を入れ始める人も見られたのだ。

岩田さんが配属されたのは、ムジンバ県のチカンガワという地域を管轄するヘルスセンター。約1万人の地域住民を対象に、外来診療やHIVの検査・治療といった医療サービスの提供、および乳幼児の健診・予防接種や住民への健康教育などの地域保健事業を行う機関だ。チカンガワは標高1700メートルの高地に位置し、林業が盛んな地域。材木を運ぶ長距離トラック運転手を相手に性産業従事者が商売をする酒場が存在することなどから、HIVの感染率が高くなっていた。そうしたなかで岩田さんのメインの活動となったのは、HIVの感染率を下げるための啓発活動や、HIV陽性者を支援する活動である。

HIV陽性者グループによる手工芸品の製造・販売を支援

医療機関に配属された岩田さん。HIV陽性者グループによる手工芸品の製造・販売を支援する活動では、メンバーたちの製造技術向上への意欲を引き出しながら、継続を後押しした。



柄が多彩な伝統布のチテンジでつくった象やキリン、ロバなどのぬいぐるみ

CASE 4 学校教育分野

鷹鷲悠史さんの事例
(ウガンダ・小学校教育・
2017年度1次隊)



鷹鷲さん基礎情報

PROFILE

1987年生まれ、東京都出身。大学では国際政治学を専攻。東京都の公立小学校に教員として約3年間勤務した後、2017年6月に協力隊員としてウガンダに赴任。19年6月に帰国。

活動概要

- ムシマ小学校(ジンジャ県ワニヤンゲ)に配属され、主に以下の活動に従事。
- 授業の実施(算数、体育)
- クラブ活動の支援(音楽、ダンス、日本文化、サッカーなど)
- 家庭訪問の実施

鷹鷲さんが配属されたのは、30人ほどのクラスが各学年に1つずつある小学校。活動の柱となったのは、一教員として算数や体育の授業を行うことだ。配属校は教科担任制がとられており、算数や体育にもそれぞれ2、3人の教員が担当となっていたが、どの教員も複数の教科を兼任。配属校ではチームティーチングが実施されておらず、鷹鷲さんはいずれの授業も単独で行った。担当したのは、算数が5、6年生で、体育が5〜7年生だ。

算数が不得意な子へのフォロー

算数の授業を開始した当初は、外国人の教員が新鮮であり、子どもたちは鷹鷲さんの話に興味を傾けてくれた。しかし、注意深く子どもの様子を見てみると、学習内容を理解できていない子がほとんどだということに気がついた。そのひとつの原因は語学だった。鷹鷲さんがウガンダの英語に慣れていないこともあったが、配属校の5年生で英語でコミュニケーションがきちんと図れるのは、語学が得意な一部の子もいた。その影響が各教科に出ていた。

5、6年生の児童の間には、算数の学力にすでに大きな差ができてしまっていた。配属校には学年ごとに「進級試験」があったが、すべて通ることもできない。このやり方は、鷹鷲さんが日本の小学校で教員を務めていたときに、「学習内容の理解が早い子とそうでない子」の間の差を埋めるために取り入れ、効果があつたやり方だったが、ウガンダでも同様だった。算数が得意な子のなかには、練習問題をつくるのも早い子があり、そうした子には、「整数だけでなく、小数や分数を使って類似の練習問題をつくる」といった、より難易度の高い課題を出した。すると、ますます意欲的にそれをこなそうとした。一方、算数が不得意な子は、時間をかけて練習問題に取り組むことができるようになったため、理解が進み、算数の学習への意欲も高まっていた。

まずは人間関係づくりから

体育授業に関する配属先の課題は、2人いた担当教員の意欲の低さだった。鷹鷲さんの着任当時、時間割には体育のコマが組み込まれていたが、「道具がない」などの理由で、2人も授業を行っていなかったのだ。実際、当初はボールひとつなかったため、鷹鷲さんはポケットマネーでバレーボールとサッカーボールを1つずつ購入して授業を行った。物があれば体育の教員の意欲を引き出せると思ったが、そうではなかった。2人は自分自身が体育授業を受けた経験がほとんどなく、授業のイメージがわからないこともあり、実施の意欲を持っていないのだと推測された。鷹鷲さんは、「意欲がないなら仕方がない」と思い、日頃のコミュニケーションは図るものの、授業へのアドバイスをしなくないでいた。

鷹鷲さんがあらためて体育教員たちとのコ

の教科の総合点で合否を決めることとなり、算数の点数が低くても、ほかの教科でカバーできれば進級できてしまう。そのため、日本では2年生で身につけるべき「九九」ができない5、6年生がいるような状態だった。算数が不得意な子へのフォローが不可欠だったが、容易ではなかった。カリキュラム上、教えなければならぬ単元の内容に対して、実際の授業時間が不足していたからだ。学期の始めと終わりは登校しない子が多く、実際に授業が成立するコマ数は建前の7割程度。結果、カリキュラムをまっとうするためには、算数が不得意な子のために時間を割いてばかりいられない状況だった。それでも、理解を超える内容を指導しても子どもたちはついてこれないので、前学年の教科書を使用して指導をし、子どもたちが理解できる授業を心がけた。そうして試行錯誤するなかでたどり着いた策は、「算数が得意な子に、特別の課題を与えろ」というものだ。授業中、練習問題を出すと、算数が得意な子はすぐに解き終え、不得意な子はなかなか解くことができない。そこで鷹鷲さんは、練習問題を早く解き終えた子に、「類似の練習問題を自分でつくる」という課題を出すことにしたのだ。問題を解く作業とは違う頭の使い方をさせる課題であり、算数が得意な子

コミュニケーションを大切にしようという心がけるようになったのは、任期も半ばになったころだ。相手の心を動かすため、まずは彼らとの人間関係を築き直そうと考えた。するとようやく、一方の体育教員に変化が現れた。鷹鷲さんが使用していた体育の教員を使って、授業を行うようになったのだ。彼女は算数を兼務している教員であり、算数の教科書を貸すなどして鷹鷲さんとの関係が深まっていた人だった。

もう一方の教員(以下、Aさん)は、結局、最後まで体育授業を行うことはなかった。しかし、鷹鷲さんの任期の終盤に、ひとつの小さな変化があった。体育授業の方法を学ぶ外部の研修会にAさんと鷹鷲さんが参加した際、布や新聞紙でボールをつくる方法を教わった。以後、鷹鷲さんは週に1個のペースで手づくりのバレーボールをつくるよう努めた。子どもたちはそれを使い、本物のボールを使うときと同じように楽しそうに競技に取り組む。すると、それを見たAさんの意欲がにわかには高まり、みずからボールの作成に取り組むようになったのだ。ボールが増えれば、グループ分けをして練習に取り組ませるなど、体育授業もやりやすくなることから、やがて「Aさんにも授業を実施してほしい」という声子どもたちから出てきたのだ。

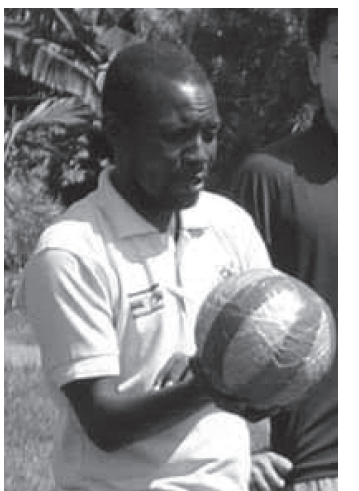
鷹鷲さんの事例の Point

苦手意識の克服が第一歩

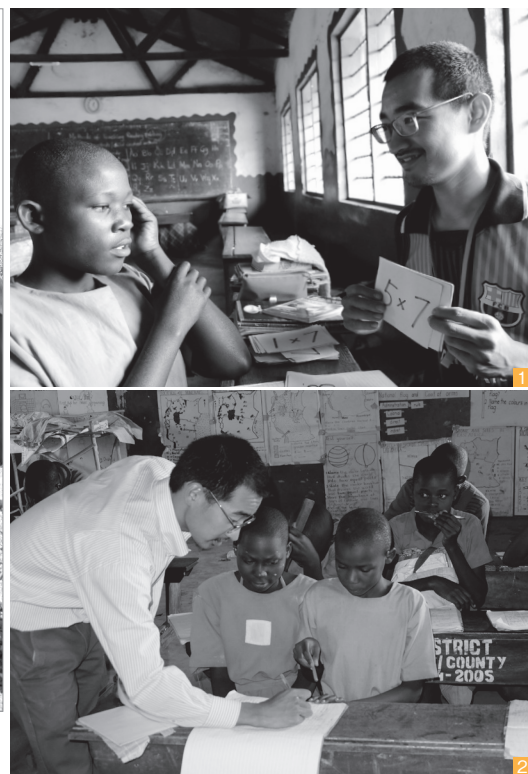
勉強は、苦手意識が高まれば高まるほど、取り組む意欲が低下してしまう。それは日本でもウガンダでも同じであり、教員はつまづきを理解し、わからない所まで立ち戻って指導することが求められる。すべての指導は児童理解から始まる。

小学校の一教員として 算数や体育の 授業を担当

小学校に配属され、算数や体育の授業を担当した鷹鷲さん。算数授業を受け持った高学年では、すでに児童の間の学力の差が大きかったなか、算数が不得意な子をフォローする方法に工夫を凝らした。



鷹鷲さんが同僚とともに参加した体育授業の研修会で、布や新聞紙でつくったボールを手にする受講者

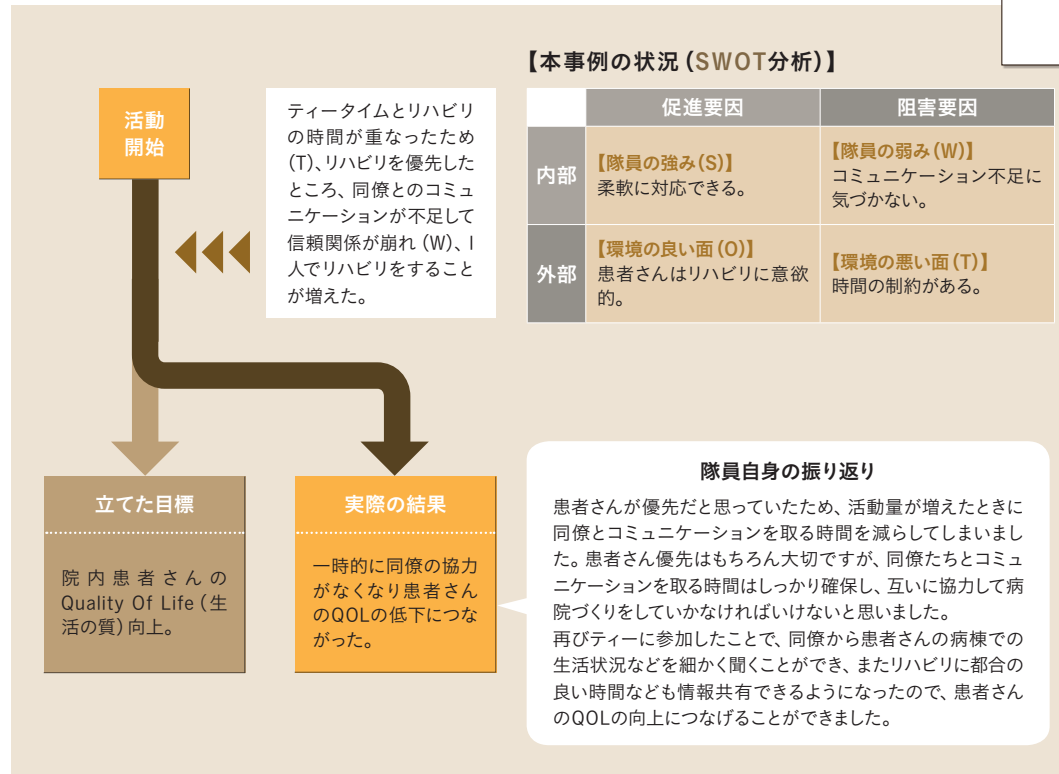


- 1 高学年になっても「九九」ができない子がいたため、そうした子には授業の合間や放課後を使って補講も行った
- 2 算数の授業で、机を回って不得意な子のフォローをする鷹鷲さん
- 3 体育授業を行う鷹鷲さん。配属校には道具がほとんどなく、陸上競技の授業も手づくりの道具で行った

“失敗”から 学ぶ #176



事例整理



ティータイムへの不参加から リハビリや看護ケアの協力が減少

文 三田村 徳さん (フィジー・理学療法士・2017年度1次隊)

フィジーではティータイム(以下、ティー)が仕事中の10時・15時にあります。ティーはフルーツやパン、お茶を飲みながらおしゃべりをする場であり、コミュニケーションをとる場としてとても大切な時間です。私も派遣直後は、配属先の多くの人と信頼関係をつくれるように、できるだけティーへ参加していました。

配属されて8カ月後には活動が順調になり、ひとりで多くの活動ができるようになってきました。また、カウンターパートである理学療法士の育休により、ひとりで患者さんを診ることが多くなりました。そのときには配属先の看護師や介護士、医師などの同僚と信頼関係が構築されていると思いき、ティーより患者さんへのリハビリテーション時間確保を優先。次第にティーへの参加が減り、約4カ月間はティーへ参加しませんでした。カバを飲むコミュニケーション(以下、カバ会)へは、仕事終わりや休日前などに男性陣宅へ行き、参加していました。

あるとき、同僚のリハビリ時に対する協力が減っていることに気づきました。以前はリハビリが始まる際に患者を起し、車椅子でリハビリ室へ連れて来るなどの協力をしてくれましたが、今は声をかけても携帯を見てばかり……。定例会議の際に看護師長へ「基本的な看護やケアなどへの協力が少なくなっている」と伝えたことで、状況は変わるばかりか、同僚との溝が深くなってしまいました。

カバ会で仲良くしていた人に不満を漏らすと、「最近ではアキラがティーに参加していないって聞いているよ」と言われ、カバ会の彼らとは仕事外でコミュニケーションをとっていました。一番近くで働く同僚から最近の事情やニーズを聞いていなかったことに気づきました。

そこで、久しぶりにティーへ参加したところ、同僚から「あら、最近見なかった顔ね」と皮肉たっぷりに言われ、コミュニケーションが取れていなかったこと、信頼関係が崩れてしまったことを痛感しました。また、「患者さんを第一に考えるアキラの気持ちはわかるけど、フィジーなんだからゆっくりにしながらリハビリを進めていいんだよ」とも伝えられました。

それからは適度にティーへ参加し、コミュニケーションの中の一環として、互いに協力できる場を大切にしていこうと、状況改善することができました。

他隊員の分析

その国に根付く考え方を学ぶ

私も日本人独特の価値観に縛られ、「お茶をすることイコール仕事を疎かにすること」と罪悪感を感じる事が多々ありました。同僚にお茶に誘われるたび、「患者さんが待っているから行けない」と断っていたら、「患者さんがじゃなくてあなたはどしたいの?」と問い詰められたことがあります。そんな概念がなかった私はポカーンとしましたが、現地の人はこういう感覚で生きているのだと気づかされました。「他人を第一に考える」のは日本では素晴らしいことかもしれませんが、「まずは自分がどしたいのか」を考えてみるのもよいかもしれません。

文=協力隊経験者

- 中南米・理学療法士・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

国立病院で担当患者のリハビリを行いつつ、遠方に住む患者がリハビリに継続して通えるよう送迎のコーディネートを行う。また、近隣の商業施設で働く労働者に向け腰痛体操教室を実施、養護学校で教諭と協力しながら児童向け体育の授業を行った。

お茶を制する者は、仕事を制する

私の派遣国もお茶文化が存在し、仕事もお茶に呼ばれることが頻りにありました。患者さんに自主トレーニングを託し、私は基本的にお茶に参加していました。お茶の時間は現地の人の本音を引き出す絶好の機会。患者さんに関する情報交換や支援先のドナーについてなど積極的に仕事の話も話していました。ほぼ毎日お茶の時間があつたため、患者さんの身体環境の変化はカンファレンスを開かなくても多くの同僚が把握できていました。現地に合った働き方を最大限利用し、最大の効果を得られるように工夫してみたいかがでしょうか。

文=協力隊経験者

- アジア・理学療法士・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

リハビリテーションセンターにて同僚への技術支援、仕事環境の改善、加えて産科病院での未熟児に対する発達支援、また地方の学校にて児童に対し疾病予防・健康維持のためのワークショップを実施。



配属先の同僚と三田村さん。三田村さんは3代目の理学療法士として配属先へ派遣されたが、2代目と期間が空いたため、新規のつもりで配属先のニーズへ応えるよう活動計画を練った。特に「配属先対象の患者に対するQOL(生活の質)の向上ができるよう同僚の医療従事者と協力して問題を解決し、習慣化していく」ことに注力した



PROFILE

1987年、宮城県出身。2010年、東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科理学療法専攻卒業後、宮城厚生協会泉病院へ入職。16年、脳卒中認定理学療法士を取得。17年に退職し、協力隊へ参加。19年6月、帰国。同年9月、訪問看護コステーション仙台中央へ就職。

活動概要

- 首都スバにある国立リハビリテーション病院にて理学療法士として、主に以下の活動を行う。
- 院内・外来患者の治療
- 巡回によりフィジー全土訪問リハビリ
- ワークショップにより知識・技術向上

*カバ…フィジーの嗜好品

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#G235 編集

- 派遣中 ▶ 1人
- 累計 ▶ 14人
- 分類 ▶ 人的資源
- 活動例 ▶ 出版物や広報物制作技術の向上のための指導 など
- 類似職種 ▶ -

※人数は、2019年9月30日現在。



ウルグアイ日系社会で最高齢とされる原野フサさん（96＝右）と長女の千鶴子さん（75＝中央）宅に移住史を届けた馬場さん。「自分が本に出るとは、長生きしたいがあったよ」と喜びの声が寄せられた

PROFILE

1966年生まれ。東京都出身。東京外国語大学スペイン語学科を卒業後、朝日新聞社に入社。静岡県浜松市や群馬県大泉町など南米系日系人の集住地域から多くの記事を発信。2017年、社の「自己充実体制」を取得し、シニア海外ボランティアとしてウルグアイに赴任。19年に帰国、読者の投稿を扱うオピニオン編集部「声」に復職。

活動概要

在ウルグアイ日本人会に配属され、当地の日系社会初となる移住史を制作し発刊する。

- 編集方針の起案と進行管理
- 取材、執筆、校正、写真撮影、編集統括
- ページデザインと制作業務全般
- 予算案の策定、印刷会社との折衝 など



馬場由美子さん

(SV/ウルグアイ・2017年度1次隊)

#D252 木工

- 派遣中 ▶ 3人
- 累計 ▶ 38人
- 分類 ▶ 鉱工業
- 活動例 ▶ 職業訓練校にて訓練生へ木工作業や製作指導 など
- 類似職種 ▶ 竹工芸、手工芸

※人数は、2019年9月30日現在。



端材を利用して新たな商品をつくる木工組合員に、技術支援を行う株田さん

PROFILE

1989年生まれ、広島県出身。デザイン学校卒業後、6年間家具メーカーで家具のデザイン・設計製作に携わる。2017年1月、協力隊に参加し、ドミニカ共和国に派遣される。2019年1月帰国。現在は、瀬戸内海にある島に移住し地域の特産品である柑橘を生かしながら、木工製品の製作を行っている。

活動概要

村落部の木工組合員の工房製品の品質の改善・木工技術の向上・新たな商品の企画を目指し、以下の活動を行う。

- 5S活動を組合員の各工房で実施
- 技術講座を不定期で開催し、商品価値・商品の特色が付けられるような技術を移転
- 家具づくりで出る端材を利用し、観光客に向けての商品の企画・フェア（イベント）での広報活動 など



株田亨樹さん

(ドミニカ共和国・2016年度3次隊)

Q メインの活動は？

近年のドミニカ共和国では、他国と同様に輸入家具が大量に入荷し、価格も安価で質の良い製品が多くあります。そのためこの環境下で、中小の工房では輸入家具に対抗できる家具の生産力や販売力までの向上を期待することは、とても難しいと感じました。そこで、年々増加傾向にある欧米などからの観光客に向けた商品開発に目を向けました。2年間週に1〜2回の頻度で、木工組合員対象に講座を開催しました。講座は、商品の開発というテーマを軸に、「デザインについて」や「5S活動」を伝え、また派遣国ではやらないような木工技術についても盛り込み、木工についての興味・関心を少しでも深める内容にしました。

Q 活動の最大の困難は？

現地の人は仕事に対する意欲がもともと低いということが、日本との大きな違いだと感じました。収入向上につながるよう開催していた講座への出席率が低いことや、参加していても集中できないため、モチベーションをどのように高めるかというのが最大の困難でした。また、木工での十分な収入が得られないことや、工房内が乱雑になっていること、停電が頻繁に起こり作業が中断してしまうことなど、作業環境が整っていないことも原因として考えられました。

Q どう対応しましたか？

講座への出席率を上げるために、座学だけでなくレクリエーションなども取り入れ、遊びながら参加できるようにしました。また、講座時間が長くなると空腹などで集中力が途切れてしまう参加者が多かったため、途中にご飯休憩を挟み、みんなで食事をする時間を設けました。これにより、コミュニケーションも多く図ることができてプラスになりました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

日本の木工技術は繊細で正確な作業を求められますが、派遣国では環境の問題や現地の人の考え方やより日本の木工とは大きく異なります。そのため、日本的な木工にこだわることではなく、現地のやり方や現地の人々の考え方を早く汲み取り、実践することが活動を円滑に進めていくコツだと思います。

日本以外の木工現場で働く経験は、さまざまな見方で考え、実践する場となるので、帰国後も環境を選ばずに活動するきっかけになると思います。楽しんでください！

Q メインの活動は？

推定350人。ウルグアイの日系社会は南米最小と言われています。2008年に移住百周年を祝いました。移住史発刊はかなわず、16年に日本人会がプロジェクトを開始。私は3代目ボランティアとして着任しました。戦前、多くの日本人が国策移民として南米に渡りましたが、日ウ間には協約がなく集団移住もありませんでした。南米で夢破れ「ウルグアイがいいらしい」と個人で転住した方々が新天地で日系社会を築いたのです。だからなのか、その組織力は他国ほど強くなく、貴重な史料も散逸寸前でした。

Q 活動の最大の困難は？

当時、本の編集方針は二転三転していました。関係者はあれこれ提案してくるのですが、自分は動かさず他人任せ。計画開始から1年半を過ぎても、印刷可能な完成素材はゼロ。協力者は減り続け、移住史編集委員会に残っていたのは4人の有志のみでした。

でもやるしかない。記者20年、編集者5年の経験を元に、何とか形にできそうな案を編集会議で示してみました。「現代史を主軸にして、一人一人の人物を深く描きたい。写真をたくさん盛り込み、読んで楽しい本ってどう？」委員全員が目を見開かせ、次々にアイデアを出してきました。ここで新たな悩みが。全部は実現できないよ……。

Q 試みた解決策は？

理想を現実に落とし込む。編集から出版までの工程とそれぞれの分量感を示し、提案者に覚悟を迫りました。「ではあなたが担当よろしくお願いします。できなければこの案はなし」

「え、馬場さんがやるのでは？」

「私は今、1人あたり10000字のインタビュー原稿を53人分、執筆中です」

お国柄によるかもしれないが、「できない」と否定形で切るより、肯定形で話しつつ断る方が理解を得やすい気がしました。次から次へと困難に見舞われましたが、バーベキューで肉を食らい、語って笑って乗り越えました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

「移住史はかくあるべき」という先入観を捨てたのが奏功しました。誰に向かって本を出すのか議論を尽くし、移住者インタビューを第1章に据え、写真を生かすべく全ページをカラーで印刷。「斬新でわかりやすい構成」「血が通っている本」と好評を得ました。

記者や編集者は仕事を抱え込みがちです。でも限られた時間で成果を出すには、地元の方々に信じて任せることが近道。日系2世の編集委員2人は卓越した語学力でスペイン語訳を校正してくれたり、幅広い人脈と交渉力で窮地を救ってくれたりしました。

為せば成る。何とかありますよ。

	2019	2018	2016	2001	1977
<p>株式会社運動会屋 本社所在地：神奈川県横浜市都筑区早渕3-30-10 創業：2007年5月 従業員数：45人 (2019年5月末時点) 事業内容：スポーツイベント、社内向け福利厚生企画・運営など URL：http://www.udkya.com/</p>	<p>10月、青年海外協力隊に参加① エチオピアのティグライ州教育局のメケレ市教育事務局に配属され、小学校3校を対象に体育授業に関する活動に従事。</p>	<p>10月、帰国。 1月、株式会社運動会屋に入社②。 同社の提携会社NPO法人ジャパンスポーツコミュニケーションズが実施するUNDOKAIワールドキャラバンを担当している。</p>	<p>3月、東海大学体育学部体育学科卒業後、スポーツクラブで体育・スポーツのコーチを務める。</p>	<p>神奈川県出身。</p>	

選択の理由

① 協力隊に参加
協力隊は知っていたが、体育という職種があるとは思っていなかった。人生のキーワードは「スポーツ」「子ども」という石井さんは、両方が叶えられる職種があると知り、参加を決意した。

② 運動会屋に就職
アフリカで就職するつもりだったが、運動会屋の「インドでの運動会普及活動」の求人を見て、面白そうだと思い応募。インドでの話は一旦延期となったが、元々活動したかったアフリカをはじめ世界で運動会を実施する事業を現在は担当。



東アフリカ・ルワンダ共和国のウムチヨムイーザ学園で実施した運動会。当日はあいにくの雨のため室内での開催となった。同学園の副理事長はNPO法人ルワンダの教育を考える会のマリールイズ氏で、石井さんから「UNDOKAIワールドキャラバン」の活動を開き、実施を希望。今回の開催となった。同キャラバンは「ひとりではできない事に価値がある」とモットーに、これまで米国、タイ、ラオス、インドなどの学校や企業で運動会を実施してきた



before ▶ after 人生を変えた2年間

before
スポーツインストラクター

↓

after
スポーツイベントの企画・運営担当

「楽しい」という「直感」から協力隊への応募を決めました」と石井さんは話す。それまでも、出会ったときに自分の中で輝きを感じる「直感」を信じ、人生を選択してきた。「体育」「ライフセービング」「空手」「協力隊」、そして今の職場である「株式会社運動会屋」。現在、石井さんは同社に所属し、世界中で運動会を開催するための企画・運営をしている。

幼い頃から体を動かすことが好きで、体育大学に入学した。あまり泳げないのに、輝いて見えたライフセービング部に入部。溺れて死にそうになった経験もあるが、好きで入った部活だったからこそ続けられ、また鍛えられた4年間だった。卒業後はスポーツクラブのインストラクターとして、子どもの教室を担当。裏表のない子どもたちと一緒にいると心が弾んだ。就職後に始めた空手に本腰を入れるため、正職員を辞め、契約社員として働きながら、全日本空手道選手権大会に出場。10年続けたとき、怪我の影響もあって一線を引いた。その後も子ども向けのスポーツクラブでコーチなどを務め、スポーツと子どもに



石井さんが企画した3校合同のドッジボール大会の様子。「子どもの笑顔が何よりもやりがい」と石井さんは話す

「楽しそう」という「直感」から協力隊への応募を決めました」と石井さんは話す。それまでも、出会ったときに自分の中で輝きを感じる「直感」を信じ、人生を選択してきた。「体育」「ライフセービング」「空手」「協力隊」、そして今の職場である「株式会社運動会屋」。現在、石井さんは同社に所属し、世界中で運動会を開催するための企画・運営をしている。

幼い頃から体を動かすことが好きで、体育大学に入学した。あまり泳げないのに、輝いて見えたライフセービング部に入部。溺れて死にそうになった経験もあるが、好きで入った部活だったからこそ続けられ、また鍛えられた4年間だった。卒業後はスポーツクラブのインストラクターとして、子どもの教室を担当。裏表のない子どもたちと一緒にいると心が弾んだ。就職後に始めた空手に本腰を入れるため、正職員を辞め、契約社員として働きながら、全日本空手道選手権大会に出場。10年続けたとき、怪我の影響もあって一線を引いた。その後も子ども向けのスポーツクラブでコーチなどを務め、スポーツと子どもに

経験が未来をつくる

石井麻夕さん
エチオピア・体育・2016年度2次隊

「楽しそう」という「直感」から協力隊への応募を決めました」と石井さんは話す。それまでも、出会ったときに自分の中で輝きを感じる「直感」を信じ、人生を選択してきた。「体育」「ライフセービング」「空手」「協力隊」、そして今の職場である「株式会社運動会屋」。現在、石井さんは同社に所属し、世界中で運動会を開催するための企画・運営をしている。

幼い頃から体を動かすことが好きで、体育大学に入学した。あまり泳げないのに、輝いて見えたライフセービング部に入部。溺れて死にそうになった経験もあるが、好きで入った部活だったからこそ続けられ、また鍛えられた4年間だった。卒業後はスポーツクラブのインストラクターとして、子どもの教室を担当。裏表のない子どもたちと一緒にいると心が弾んだ。就職後に始めた空手に本腰を入れるため、正職員を辞め、契約社員として働きながら、全日本空手道選手権大会に出場。10年続けたとき、怪我の影響もあって一線を引いた。その後も子ども向けのスポーツクラブでコーチなどを務め、スポーツと子どもに



- *1 光回線…光ファイバーでデータを送信する通信回線。
- *2 PoC…「Proof of Concept (概念実証)」の略。AIなど新しい技術を使ったサービスの開発に先立ち、サービスの一部の実現性や効果などを検証する業務。
- *3 フロントエンドエンジニア…ユーザーが直接触れる部分に携わるエンジニア。
- *4 IoT…「Internet of Things」の略。コンピュータなどの情報通信機器以外の物に通信機能を持たせ、インターネットに接続したり、相互に通信したりすることで、自動認識や自動制御、遠隔計測などを行うこと。
- *5 ラズベリーパイ…消費電力が小さいプロセッサを使用したシングルボードコンピュータ（1枚の基板にプロセッサなど必要最小限の部品を付けただけの簡素なコンピュータ）。
- *6 衛星通信…人口衛星を介して電波の送受信を行う通信システム。

B 私が現在携わっているPOCというタイプの仕事には、「納品物」など明確なゴールがありません。そうした仕事では、ゴールを自分たちで設定しながら進めていかなければならないです。

B 私が現在携わっているPOCというタイプの仕事には、「納品物」など明確なゴールがありません。そうした仕事では、ゴールを自分たちで設定しながら進めていかなければならないです。

C 私が協力隊経験によって身につき、今の仕事に生きていると感じているのは、「自分を律する力」です。協力隊活動は与えられた債務をこなすものではないので、手を抜くこともできず、そうしたなかで、「ここまではやり遂げる」という目標を自分で自分に課しては、誰に言われずともそれを実行していく。それを積み重ねていくことで、おのずと「自分を律する力」が身についた。それは協力隊活動に限らず、どのような仕事でも人から信頼を得るためには重要なものだろうと思います。

B 私は協力隊経験によって「明確な言葉でコミュニケーションする習慣」が付いたと自覚しているのですが、それがプロジェクトチームをマネジメントするときの力になると受け止められたのではないかと感じています。多くの日本人がそうかもしれないと思いますが、派遣前、「軋轢を生まないよう、あいまいで柔らかな表現を使う」という傾向が強いタイプでした。しかし、慣れない外国語でそれをするのは難しいため、協力隊活動では伝えたいことを刀直入な表現で伝えるしかなかった。すると、次第に「はっきりと断る」「はっきり注文する」といったことに慣れていって、そういったコミュニケーションによって「認識の食い違いから生じるトラブル」を避けられることもわかっていきました。実際、今の仕事でも、プロジェクトチームのメンバーに常に同じ方向を向いてもらううえで、明確な言葉でコミュニケーションすることは不可欠だと感じています。

座談会参加者



A さん (男性)

【派遣前】
通信建設会社社員
【協力隊】
▶退職参加
▶・PCインストラクター
・アジア
・2014年度派遣
▶公務員等の研修施設でPCの講座を担当
【現在】
開発コンサルティング会社社員

B さん (女性)

【派遣前】
システム開発会社のSE
【協力隊】
▶退職参加
▶・PCインストラクター
・アジア
・2014年度派遣
▶小中高一貫校でITの授業を担当
【現在】
AIベンチャー社員(プロジェクトマネージャー)

C さん (男性)

【派遣前】
システム開発会社のSE
【協力隊】
▶退職参加
▶・コンピュータ技術
・大洋州
・2015年度派遣
▶病院のコンピュータシステムの管理を支援
【現在】
メーカーのSE

理想 現実
帰国後のとを語り合う

OB・OG 匿名 座談会

第 11 回 IT分野篇

B 私、も協力隊時代にIoTに関する認識を広げることができました。「インターネットの力」に関するものです。私の任地は地方

B 私、も協力隊時代にIoTに関する認識を広げることができました。「インターネットの力」に関するものです。私の任地は地方

A 「途上国は技術が遅れているので、協力隊に参加しても自分自身の技術面の向上は望めない」という見方もあるかと思いますが、私自身は協力隊時代にIoTの新たなスキルを身につけることができました。派遣国では当時、パスの位置情報がかかるシステムの普及実証が行われていたのですが、そこでは、私が扱ったことのなかったIoTの技術が使われていました。私はその事業に関連する小型コンピュータの「ラズベリーパイ」を関係者から譲り受け、自分の活動のなかでメールサーバーを構築して演習に使うなどしました。そうした低コストのIoT技術は途上国の方が導入の場が広く、協力隊員にはそれらについて学べるチャンスを与えられているということだろうと思います。

A 私が現在携わっているのは、一定のゴールに向けて立てられた計画をこなしていく「プロジェクト」というタイプの仕事です。計画をまっとうし、成果物を提出して初めてクライアントからお金がもらえるものであり、そこで何より重要なのは、計画を最後までやり遂げる力です。そうした力を養ううえで、2年間という協力隊の任期をまっとうするだけでも価値があると、私は感じています。協力隊は生活や活動がかならずしも楽ではないですが、その任期をまっとうすれば、「最後までやり遂げる力」についての大きな自信になるからです。

IoTについて学んだこと

帰国後の進路開拓

A 私は通信建設会社で光回線の敷設工事などに携わってから協力隊に参加し、公務員などを対象とする研修施設でPCの講座を担当しました。帰国してすぐに土木分野を専門とする開発コンサルティング会社に就職し、これまでアジアでのインフラ整備事業などに参加してきました。

B 派遣前はSEとして主に金融業界のシステムの開発などに携わっていました。協力隊では小中高一貫校のIT授業を担当しています。帰国して最初に就いた仕事は、環境分野のシステムを開発する会社のSE職で、その後、AIのPOCなどを手掛けるベンチャー企業に転職し、プロジェクトマネージャーを務めています。

C 私も派遣前の職はSEで、保健センターなどで使うシステムの開発に携わっていました。協力隊では病院に配属され、データベースのメンテナンスなど「何でも屋」のSEとして活動しました。任期終了後、配属先から依頼を受けて直接の雇用契約を結び、給料をいただくながら約1年半、SEの仕事を担当しました。その後日本のメーカーに就職し、海外の自社工場に導入する生産管理システムのフロントエンドエンジニアとして働いています。

A 私はたまたま協力隊時代に現在の勤務先が関係するプロジェクトを手伝う機会があり、それが縁で派遣中にスカイプ面接を受けることができたので、再就職に向けた活動をほとんどしていません。おふたりは帰国後の就職活動で苦労はなかったのでしょうか。

B 「協力隊経験者は採用しても、また何かおもしろそうなこと見つけたら、すぐ

B 私の現在の勤務先には海外の自社工場がいいくつかありますので、それらにシステムを導入する仕事には少なくともこの5年間はかかわり続けることになると思います。その後についてはまだ考えていないのですが、やはり私も途上国の方々に支援するような仕事に携わりたいという思いはありますので、JICAの企画調査員(ボランティア事業)などでふたたび協力隊の現場にかかわる、といった選択も考えています。

C 私の現在の勤務先には、「AIをすべての人のものに」という目標があります。弊社の技術が何らかの形で途上国の方々に役立つような時代が来れば、私もそうした仕事にかかりたいですね。

A そうしたIoT格差が技術の進歩などでは是正される時代が来てほしいものです。私自身も開発コンサルタントのひとりです。大きなプロジェクトの総括を任せてもらえるようしっかりと経験を積み、途上国の方々に公平な機会が与えられるような社会づくりに貢献していきたいです。

C 私はおふたりとは違い、IoT化から取り残されていく国の姿を派遣国に見ました。私の派遣国は群島国なのですが、人口が少ないため、離島まで海底に光回線を敷くような投資にはうまみがなく、衛星通信はランニングコストが非常に高いことから、離島ではいまだにインターネットが一切使えないのです。

A 「プロジェクトマネージャーの仕事が向いている」と指摘された」とのお話ですが

協力隊で得た力

C IT業界の仕事であっても、条件を設けると就くのが難しいという点は、私も帰国後に行った就職活動で感じました。私は自分のキャリアを踏まえ、「保健・医療分野」「海外にかかわりがある」という条件を設定してシステム開発の仕事を探したのですが、書類選考でだいぶ落とされてしまいました。結局、後者の条件だけに絞って探したところ、現在の勤務先に就職することができたのです。

A 「プロジェクトマネージャーの仕事が向いている」と指摘された」とのお話ですが

C IT業界の仕事であっても、条件を設けると就くのが難しいという点は、私も帰国後に行った就職活動で感じました。私は自分のキャリアを踏まえ、「保健・医療分野」「海外にかかわりがある」という条件を設定してシステム開発の仕事を探したのですが、書類選考でだいぶ落とされてしまいました。結局、後者の条件だけに絞って探したところ、現在の勤務先に就職することができたのです。

生活に役立つ技

あるもので日本の味

ナビゲーター = 小柳清美さん
(日系SV/ドミニカ共和国・ソーシャルワーカー・2011年度派遣)

甘納豆のつくり方

日系の方は日本の食材を現地にある材料で作っていました。皆さんに触発され、日持ちが良いと甘納豆を作りました。ドミニカ共和国には小豆はありませんでしたが、煮方を調整すれば派遣国にある豆で代用してつくることもできます。

- 【材料】
- 小豆…150g (黒・赤・白インゲン豆でもOK。その場合、工程①の前に豆を洗い、ひと晩浸水させる)
 - 砂糖…200g
 - グラニュー糖 (仕上げ用) …20g

- ① 洗った小豆と500mlの水を鍋に入れて火をかけ、沸騰させる。10分ほど茹でてよく抜きのために湯を捨てる。
- ② 鍋に再度小豆と水400mlを火にかけて、沸騰したら極弱火にしてあくを取りながら差し水をし、50分ほど煮る。指でつぶせるほど柔らかくなったら火を止め、蓋をして30分蒸らし、汁を捨てる。
- ③ 別鍋に砂糖100gと水150mlを火にかけて砂糖を溶かし、沸騰後火を止める。②の小豆を入れ蓋をしてひと晩蒸かせる。
- ④ 別鍋にザルを置き、③の小豆と汁に分ける。汁の入った鍋に砂糖100gを加えて火をかけ、沸騰したら弱火にして小豆を加え煮る。汁気がなくなったらザルにあげる。
- ⑤ ザルや皿 (あればオープンシート) に小豆を広げ、乾かす。派遣国は南国で蟻が寄ってきたら困ると思い、小分けして冷凍にしました。
- ⑥ 食べるときにグラニュー糖を振れば完成! 冷凍庫から出してそのまま食べます。甘納豆を入れた抹茶パウンドケーキは現地の人にも喜ばれました。

知ったく情報

筋トレで健康に! ④

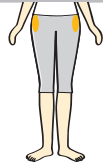
ナビゲーター = 山村昂平さん
(ジンバブエ・陸上競技・2016年度3次隊) アスレチックトレーナー

中臀筋ストレッチと体幹中臀筋トレーニング

今回の筋トレは少しハードな内容となっております。筋トレでも生活でも現状維持では衰退するばかりです。身体は負荷に慣れてしまうと変化しません。筋トレもドンドンレベルを上げ健康な身体をつくり上げましょう。

中臀筋ストレッチ → 体幹中臀筋トレーニング (左右各5回から徐々に増やす)

この筋肉にきく!
中臀筋…お尻の上部の側面にあり、足を外側に開くときに使われる筋肉。鍛えることで体幹の安定性を高めることができる。
※痛みや違和感がでる場合には中止してください



0 まずは、ストレッチ。

30秒交互に1セット。



- ポイント
- ① 椅子に座り足首を膝に乗せる。
 - ② 足首を乗せた方の膝に両腕を乗せ身体を少し前に倒し体重をかけていく。



- ポイント
- ① 上から見て肩から膝が一線になるように。
 - ② 特にお尻が引けてしまい「くの字」にならないようにする。

2秒で上げ、2秒キープ。2秒で降ろす。最初は片方5回ずつ (回数をこなすのではなく正しく行い慣れたら回数を増やす)

2 腰を上げ、膝から肩を一直線にし、膝を開く。



- ポイント
- ① 上げるときもお尻が引けて「くの字」にならないようにする。
 - ② 膝を前後に移動させず真上に上げる。
 - ③ 上げきったら上で2秒キープ。

活動に役立つアイデア

環境教育ワークショップ

ナビゲーター = 吉田晴乃さん
(スウェーデン・環境教育・2016年度4次隊)

風呂敷ワークショップ

- 【所用時間】60分
【人数】5人以上 (5人で1グループ)
【用意するもの】●風呂敷用布 (見本用) …数枚 ●説明に必要な資料
●古布 (正方形で風呂敷として使用できるもの) …参加者が持参
【目的】身近なものでビニール袋の代用品ができることを知ってもらい、ゴミへの意識を向上させる。

- ① 自己紹介
- ② アイスブレイク (簡単なゲームなどなんでもOK)
- ③ ワークショップ開始
【導 入】ビニール袋配布禁止による影響、メリット・デメリットなどを問題提起。
【実践①】5人×数グループに分かれて風呂敷の基本的な結び方の練習。
【実践②】基本的な結び方を使ってカバン状にアレンジ。
【まとめ】
- ④ 記念写真



風呂敷の結び方 (基本のバッグ)

- ① 風呂敷の裏を上にし、左右の角をそれぞれひとつ結びにする。
- ② 結び目を内側に入れるようにして、表面を出す。
- ③ 結んでいない両角で真結びをする。

風呂敷の結び方 (リボンバッグ)

- ① ノートや書類などを下から3分の1ほどの位置に置く。
- ② 2秒で上げ、2秒キープ。2秒で降ろす。最初は片方5回ずつ (回数をこなすのではなく正しく行い慣れたら回数を増やす)
- ③ 上下の角を真結び。
- ④ 形を整えて出来上がり。上の結び目部分が持ち手になる。
- ⑤ ワークショップの参加者に人気の包み方でした。

風呂敷の結び方 (リボンバッグ)

- ① 風呂敷の裏を上にし、左右の角をそれぞれひとつ結びにする。
- ② 結び目を内側に入れるようにして、表面を出す。
- ③ 結んでいない両角で真結びをする。
- ④ 結んだら形を整える。
- ⑤ 完成。上の結び目部分が持ち手。中身の出し入れがしやすいバッグです。

風呂敷バッグでゴミ意識を向上

任期後半、他隊員から配属先で環境教育をやってほしいと依頼を受けるようになり、そのひとつとして、手工芸隊員の配属先である、職業訓練校に集うママたちを対象としたワークショップを開くことになりました。ちょうどそのころ、政府によりビニール袋の使用が禁止に。ビニール袋の代替として、また手工芸とも関係がある風呂敷紹介をワークショップに取り入れることにしました。真結びが難しく、現地の人が風呂敷を生活に取り入れるのはハードルが高いかもしれませんが、風呂敷は日本文化紹介、環境教育、手工芸など多様な切り口で利用できるの、活動に取り入れてみてはいかがでしょうか。

基本の結び方 (2パターン)

この2つさえマスターすれば風呂敷結びのパターンは無限!

ひとつ結び

- ①
- ②
- ③

真結び

- ①
- ②
- ③

真結び

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥

真結びは、頑丈に結べかつ簡単にほどける結び方。ほどくときは、⑥の①の部分を右方向に引いたあと、②の結び目を持ち右に引くとスルスルと①から抜けます。

ひとりひとりの自覚が大事！ 公用旅券事故から学ぶ | No.9

公用旅券紛失・事故発生件数0を目指しましょう！



2016～18年度の3年間の公用旅券の事故発生件数を、JICAの派遣形態ごとに見てみましょう。

旅券事故 件数 (単位:件)	職員		専門家等		協力隊		調査団	
	紛失	紛失以外	紛失	紛失以外	紛失	紛失以外	紛失	紛失以外
2018年	0	2	4	1*	4	2	0	0
2017年	2	3	4	4	2	2	0	0
2016年	0	0	4	2	4	1	1	0

*未達

事故の内容を検証してみると、紛失の場合には、「移動のバスやタクシーの中にバッグを置き忘れた」「旅行中、寝台列車のなかで就寝している間にバッグを盗まれた」「レストランで食事中、背もたれに置いていたバッグを盗まれた」など、「公用旅券をパスポートホルダーに保管せず、貴重品などと一緒に入れていたため、バッグを盗まれる、置き忘れるなどにより、事故が発生」したケースが多発しています。

つまり、これら事故の多くは、以下の旅券紛失事故防止5か条を守っていれば、予防できるものです。皆さんも

派遣前の注意喚起や、旅行シーズン前の派遣国事務所からの連絡で十分認識しているとは思いますが、派遣国での生活に慣れてくると、気が緩み、「これくらいは問題ないだろう」「自分は大丈夫」と油断しがちです。改めて、以下の5か条とともに、最近のご自身の旅券管理の状況を点検してみてください。

【旅券紛失事故防止5か条】

- ①肌身離さず！(パスポートホルダー使用)
- ②ほかの貴重品とは一緒にしない！
- ③使用後は、鍵の掛かる場所にしまったことを確認！
- ④不要時には携行しない！
- ⑤旅行中は特に気が緩みがち！

JICA海外協力隊は、他のスキームと比べ派遣人数も多いので、隊員全体から見た発生件数割合はひと握りの数ですが、とは言え、旅券事故は、ひとりひとりが十分に留意することで未然に防げるケースが多いので、皆さんの自覚で事故発生件数「0」を目指していきましょう！

グローバルフェスタJAPAN2019で協力隊ブースを出展



協力隊ブース内で行われた「地球の歩き方」のゲスト鷹野悠史さん(ウガンダ・小学校教育・2017年度1次隊)

9月28、29日、東京・江東区のお台場センタープロムナードで、日本最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタJAPAN」が開催され、18万3743人が来場しました。このイベントに青年海外協力隊事務局はブースを出展し、協力隊を目指す人が協力隊経験者に直接、相談・質問できる個別相談会や、協力隊経験者が派遣国の文化・食・人を自身の活動を交えて伝える『協力隊の歩き方』を実施しました。

29日のスペシャルステージでは、カメルーン生まれ・関西育ちの漫画家、星野ルネさんと一緒に協力隊を知るスペシャルトークイベントが開催されました。角雄介さん(セネガル・野菜栽培・2015年度2次隊)と清水梨沙さん(ソロモン・環境教育・2016年度4次隊)の話聞いた星野さんは、「現地の立場や考え方を大事にするという協力隊員の活動の姿勢や、相手を支援するだけではなく自分も何かを得て帰ってくる、ということを知れた。チャレンジしたいことがある人は協力隊にエントリーしてみてください」と話しました。



「カメルーンにいたころ母の知り合いに協力隊がいたけれど、私は協力隊という名称を知っている程度だった」と星野さん(中央)

JICA海外協力隊への外務大臣感謝状授与式を開催



「2年間で得た経験や知見を日本や国際社会に還元していきたい」と話す竹本さん

10月3日、帰国したJICA海外協力隊への外務大臣感謝状授与式が、東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルにおいて開催されました。

授与式には、帰国した青年海外協力隊員とシニア海外ボランティア、46人が出席し、鈴木馨祐外務副大臣から感謝状を授与されました。来賓として塩谷立衆議院議員、三原朝彦衆議院議員(「日本の国際協力 特に青年海外協力隊の活動を支援する国会議員の会」(JICA議連)幹事長)、山本幸三衆議院議員(JICA議連)、松本剛明衆議院議員(JICA議連)、大島敦衆議院議員、伊藤信太郎衆議院議員、左藤章衆議院議員(JICA議連)、富岡勉衆議院議員、金子恵美衆議院議員(JICA議連)、松下新平参議院議員(JICA議連)、白眞勲参議院議員、武井俊輔衆議院議員、新妻秀規参議院議員(JICA議連)、江島潔参議院議員、竹谷とし子参議院議員、櫻井周衆議院議員、井上一徳衆議院議員が参加され、北岡伸一JICA理事長も参加しました。

授与式では、鈴木外務副大臣に労いと激励の言葉をいただいたのち、隊員代表として、竹本大起さん(マラウイ・理科教育・2017年度2次隊)があいさつ。授与式に続いて行われた懇親会では、早瀬幸博さん(SV/ベトナム・体操競技・2017年度2次隊)、三島幸子さん(モロッコ・日本語教育・2017年度2次隊)が、活動を報告しました。

いつ? どこ?

隊員関連イベント情報

JICAやその関連団体が主催・共催・後援などをするJICA海外協力隊関連のイベントをご紹介します。

12月22日

第三回 全国OV教員・教育研究シンポジウム

兵庫



2018年のシンポジウムの様子。関西(兵庫、大阪、京都)を中心とした協力隊OB・OGと協力隊参加予定者など167人が参加した

開発途上国での人づくり、国づくりの経験を日本の教育現場で生かすため、全国の協力隊OB・OGなどが集い、多文化共生やグローバルといった視点で実践的な交流を行うシンポジウム。これから協力隊として派遣される教員も参加し、派遣へ向けた準備や心構えと帰国後の協力隊経験の生かし方を共有します。3回目の今年は、東京都市大学教授の佐藤真久氏による基調講演や、元タンザニア隊員(養護教諭)が帰国後の教育現場で実践した国際理解教育の発表に加え、派遣半年後の現職教員と会場をTV会議で繋ぎ、情報の共有や活動へのアドバイスをする予定です。

- いつ? 12月22日(日) 10:00～
- どこ? JICA関西センター(兵庫県神戸市)
- 連絡先 青年海外協力隊事務局人材育成課 jvtpc@jica.go.jp

11月9日

世界を知ろう!

北海道

青年海外協力隊体験談とニュージーランド紹介

苫小牧市から派遣されていた渡部宏美さん(中華人民共和国・日本語教育・2017年度1次隊)が派遣国での活動や生活を紹介します。また苫小牧市国際交流員が母国ニュージーランドの紹介を行います。

- いつ? 11月9日(土) 09:30～11:30
- どこ? COCOTOMA-ココトマ-ラウンジ(北海道苫小牧市)
- 詳細 「JICA北海道(札幌)」ウェブサイト内「イベント情報」をご覧ください。

12月7日

国際協力キャリアフェア2019

東京

国際協力の分野で学びたい、働きたい人に対するキャリア支援として実施されている同フェア。個別ブースでの国際協力関連機関・企業・団体などによるキャリア相談や各種セミナーなどを実施します。

- いつ? 12月7日(土) 13:00～19:00
- どこ? JICA市ヶ谷ビル(東京都新宿区)
- 詳細 https://www.idj.co.jp/?page_id=4654

外務大臣になった教え子と34年ぶりに再会



(左から) 西岡周一郎日本マラウイ協会副会長(前在マラウイ日本国特命全権大使)、塚田さん、カサイラ大臣、松岡さん

8月31日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで、日本マラウイ協会主催の「マラウイを語る集い2019」が開催されました。TICAD7の開催に合わせ来日したマラウイ共和国副大統領や国務大臣、駐日マラウイ共和国大使、同協会の会員やマラウイに派遣された協力隊OB・OGなど183人が参加しました。

このイベントで、マラウイの外務国際協力大臣フランシス・カサイラ氏と、松岡洋一さん(マラウイ・理数科教師・1982年度4次隊)、塚田雅人さん(マラウイ・理数科教師・1983年度1次隊)が、34年ぶりの再会を果たしました。カサイラ大臣は学生時代に松岡さんと塚田さんの理数科の授業を受けており、来日にあたり2人との再会を希望。集いでは「プロフェッショナルな先生たちで、大学の授業についていけたのも2人のおかげ」と感謝の言葉を述べました。松岡さんは当時の大臣を「たいへん優秀な生徒だったと思います」と振り返り、塚田さんは「30数年経って今、当時の生徒がマラウイのためにがんばっている姿を見ることができて、教師冥利に尽きると感じています」と再会を喜びました。

「JICA理事長表彰」表彰式を開催

JICAでは、国際協力事業を通じて開発途上国の人材育成や社会発展に多大な貢献をされた個人・団体に対し、その功績を讃え、「JICA理事長表彰」を授与しています。15回目の今年は、58個人・団体が表彰され、その表彰式が10月8日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで開催されました。横浜国立大学学長補佐役の藤掛洋子さん(パラグアイ・家政・1992年度2次隊)、元国際協力専門員の金森秀行さん(マラウイ・農業土木・1978年度1次隊)、同じく元国際協力専門員の富高元徳さん(フィリピン・家畜飼育・1974年度1次隊)、矢島亮一さん(パナマ・村落開発普及員・1998年度3次隊)が理事長を務めるNPO法人自然塾寺子屋、JICAボランティア事業を支援している秋田県青年海外協力隊を支援する会などが表彰されました。

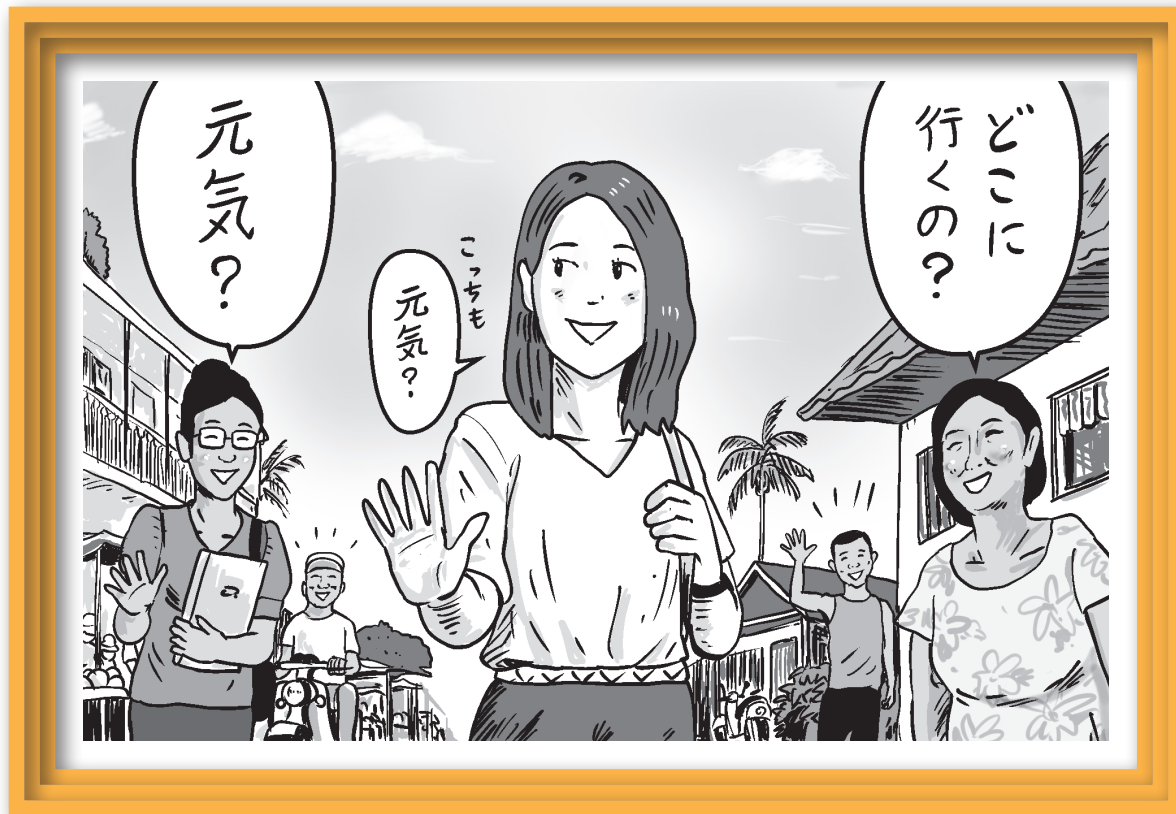
2017年度2次隊の帰国者数

2017年度2次隊の帰国者数は次の通りです。

2017年度2次隊帰国者数(2019年9、10月帰国/予定)	
青年海外協力隊	146人(42カ国)
シニア海外ボランティア	45人(19カ国)

つぶやき

お題 ▶ 質問



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

素敵な習慣

家を出ると大家さんから「どこに行くの?」学校では先生から「元気?」と、いつもみんなが声を掛けてくれる。毎日毎日同じ質問だなあと思っていたが、これは彼らの「あいさつ」なんだと気づく。色んな人と声を交わし合う、素敵な習慣。今では私もたくさん質問している。

ペンネーム:メコン川が癒やしさん(女性) 協力隊員(アジア・小学校教育・2018年度派遣)

★万国共通

「彼氏いるの?」他愛もない会話から必ず聞かれるこの質問。「いない」と返せば、「この国の男性はどうだ」と99パーセント勧められる。「日本人がいいな」と言えば、「連れて帰りなよ」と冗談交じりの粘りの返答。恋愛ネタって、万国共通。体格のよさ、紳士的な立ち振る舞いには惹かれるんですけどね。

ペンネーム:こぶたさん(女性)
協力隊員
(大洋州・コミュニティ開発・2018年度派遣)

★★答えを探して

オフィスの方「何しに来たの?」。私「わたしに何ができるの?」。何度繰り返したかこの質問合戦。繰り返すばかりではただの平行ワールドと、少し角度を変えて交点を探ろうとするも、方向を誤ると広がる互いの距離(涙) それでも交点を探し続ける1年半。「交点」どこにあるの?

ペンネーム:ネバママさん(女性)
協力隊員(アジア・交通安全・2017年度派遣)

★★★誰が掃除するの?

派遣国で「レチョン(豚の丸焼き)」は大好き。先日、友人の誕生日会に招かれ、家の庭先でレチョンづくり開始。生きた豚を縛って、解体して、焼くこと4時間。出来上がったレチョンを家の中に運ぶのですが、脂が滴り落ちています。それをリビングへ……当然、床は脂まみれ。土足文化の派遣国、床は脂と残飯と泥で悲惨に感じるのですが、それは私だけのようです。私は途中で帰ったのですが、誰がそれを掃除したのでしょうか? 気になって仕方ありません。でもレチョンづくりで褒められたのは嬉しかった〜!

ペンネーム:もーがんさん(男性)
SV(アジア・コンピュータ技術・2018年度派遣)

募集中のお題

「リフレッシュ」「現地化」「ご褒美」

投稿は『クロスロード』編集室まで
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?



CROSS YELL!!

—先輩隊員からの置き土産—



「この学校にいさえすれば良い」と言われていました。

はっとりこうへい
文=服部晃平さん

- ▶パプアニューギニア
- ▶理科教育
- ▶2017年度3次隊

PROFILE

1993年生まれ、岡山県出身。公立高校の講師を経て、2018年1月、協力隊員としてパプアニューギニアに赴任。20年1月に帰国予定。

活動概要

ホスキンス・セカンダリースクール(西ニューブリテン州ホスキンス)に配属され、主に以下の活動に従事。

- 理科の授業を担当し、身近な物を使った実験や教材を開発・導入
- 同僚教員への技術指導

私は日本の中学3年生～高校3年生にあたるセカンダリースクールに理科教員として配属されました。活動の最初の壁となったのは、同僚の先生たちが皆、多くの授業を抱えており、その日の担当授業が終わると疲れてすぐに帰ってしまうことです。彼らへの技術指導をしたくても、できないのでした。公務員の給料が長期間、未払いになることも多々あり、そうした背景を知れば知るほど、同僚の先生たちにさらなる教材研究を促すことはためられました。そもそも、私は彼らより若いため、当初は「技術指導をするボランティアだ」と認識されていなかったと思います。「あなたはこの学校にいさえすれば良い。それが学校のステータスになるんだ」。そう言われたのを今でも覚えています。

自分の担当授業をこなすだけという状態のままで半年以上が経ったころ、教頭先生から突然、ある提案をされました。「来週、教員研修を開く。何でも構わないからプレゼンをやってくれないか」。かなり無茶な要求でしたが、返事は「イエス」。これを逃したら、「授業をするだけのボランティア」で終わってしまいそうな気がしたので、全力でプレゼンの準備を行いました。

設定したテーマは「理科実験の重要性」。自分の考えがうまく伝わるか不安でしたが、当日の先生たちの反応は予想を超えた好感度で、いくつかの質問や意見が返ってきました。彼らは漠然と「実験や教材開発は良いもの」と認識していたものの、なぜそれらが必要なのかまでは研究・認識が進んでいなかったようで、そ

の点に関する彼らの疑問にうまく答えることができたため、彼らの私を見る目が変わりました。

それからは、彼らに教員研修の内容について相談されたり、授業でどんな実験をしているのか聞かれたりするようになりました。私が押しかけるのではなく、彼らのほうから進んで話を聞いてくれるようになったので、結果的に良い関係が築けたのだと思っています。

半年間の「完全放置状態」から、いきなりビッグチャンスが与えられる。日本では考えられない流れですが、それに応えられたことは本当にいい経験になりました。



不安になるかもしれないけれど、チャンスは必ずやってくる!

思うような活動ができないからといってもげれば、配属先との間に摩擦が生まれることもあります。焦らず、チャンスの到来を待つ。それをものにすることができれば、配属先の認識も大きく変わるはずです。



教員研修で、「理科実験の重要性」について講義を行う服部さん



今月号の表紙
ザンビア



くらもとゆき
文=蔵本有紀さん

(ザンビア・PCインストラクター・2016年度4次隊)

私は農村部の小・中学校で、子どもたちが「楽しい」と感じるようなIT授業のアイデアを現地の先生とともに創ってきました。IT授業がない低学年のうちからパソコンに親しんでもらいたいと考え、思いついたのが、校舎の壁にパソコンの絵を描くこと。ある日の放課後、壁画の前に座り、ノートを取り出してキーボードの絵を写している低学年の子どもたちを見つけ、思わず撮影したのがこの写真です。涙が出るほどうれしい出来事でした。